

家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

2



第七十八卷 第二号 日本幼稚園協会

# これからの保育

〈全6巻〉

大場牧夫・海卓子・平井信義・本吉圓子・森上史朗共著（A5・軽装版・セットケース入り）



- 若い先生も、ベテランの先生も、原点に立ってもう一度“保育”を考えてみませんか。基本的な問題を考えてみませんか。あなた自身“これからの保育”を確かなものとするために。
- 平易な文章で語りかける全6巻。保育の実事例や座談会などが豊富に入っていて、読みやすさ抜群です。

好評発売中!!

セット価格 9,600円  
(全6巻)

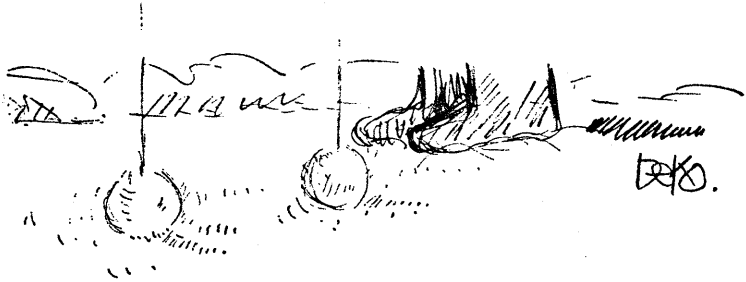
<p>第1巻</p> <p>「遊ぶとは何だろう」</p> <p>〈これからの保育1〉</p>	<p>第2巻</p> <p>「自由とは何だろう」</p> <p>〈これからの保育2〉</p>	<p>第3巻</p> <p>「課題とは何だろう」</p> <p>〈これからの保育3〉</p>	<p>第4巻</p> <p>「生活とは何だろう」</p> <p>〈これからの保育4〉</p>	<p>第5巻</p> <p>「集団とは何だろう」</p> <p>〈これからの保育5〉</p>	<p>第6巻</p> <p>「総合とは何だろう」</p> <p>〈これからの保育6〉</p>
--	--	--	--	--	--

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

# 幼児の教育

第七十八卷 第二号



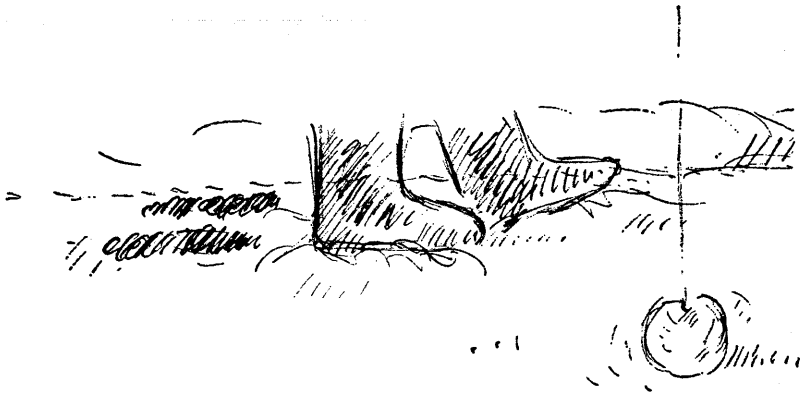


幼児の教育 目次

——第七十八卷 二月号——

© 1979  
日本幼稚園協会

心静かに……	堀内 康人……(4)	表紙	油野 誠一
私の幼児教育論(二)	佐々木正美……(6)	カット	中島 英子
——依存と自律——			
ルソーの夢			
——むすんでひらいて考——(その六)	海老沢 敏……(11)		
大人になってゆく子ども			
成長発達のリズムと教育(中)			
——思春期以後——	伊藤 隆二……(18)		



復刻・幼児の教育……………(24)

一つの疑問と一つの提案……………太田 茂行…(26)

私の保育日誌……………おおたるみ…(29)

保育随想

——幼稚園から家庭へ——……………大下 祥子…(30)

保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十三)……………津守 真…(36)

子どもの世界の中のモノ……………実M・J・ランゲフェルト…(43)

吉 晴 夫 訳……………(43)

# 心 静 かに

堀 内 康 人

良い意味の若い世代の爆発であれば結構ですが、それが非行であったり、最近では小学生の殺人傷害、自殺といったニュースが目立って来ました。喉元過ぎれば熱さ忘れるで、こうしたあきれた、いたましい事件が起きると新聞でテレビで大き過ぎし、それもいつしか忘れ去られ、時がたつとまた新しい子どもの事件が起きます。

大人は大人で政治権力の座をめぐって表面ではフェアーに、裏面では権謀術数を繰返しております。なにかが狂っている世の中だというのが生活実感として国民大衆に拡がっている。

円高ドル安の国際経済状況、不景気の深刻な深まりの中で、消費の美徳は一向に反省を見せず、人間の特質的欲望は加熱するばかりです。農民は農機具の、都会人は分譲マンション・自動車のローンにおいかけられ、最近では多重放送などという放送変革が現われ、こ



れまで通りのテレビジョンを見ていたのでは時代の進歩に取残されてしまうのではないかというような不安が生活感情の中に顔をのぞかせています。

私もはこうした現代社会生活の根源的なところで、静かに親と子どもの生活を考えて見る必要がある様に思います。

子どもにはテレビも番組をえらんで見せている、玩具も本も与えている、幼稚園へも高い月謝を払ってやっている、食品公害のない様な考慮もはらっている、これだけやっていたら自分の子どもが健全に育たない筈はない。だから我々も青春を取戻すためにテニスをやるう、ママさんバレーチームで楽しもうということになります。

賢明なお母さん方はどうも物質的選択に賢明であるが基本の所で、子どもと向き合った所で、子どもの心と通い合う様な心の選択で欠陥をもっている様です。

「お母さんお話して」と子どもに要求された時に果して何人のお母さんが子どもの心をうっとりさせ、子どもの心に浸み込んで行く様な話がお出来になるでしょうか。

適時適切な環境作り、これは言葉は簡単ですが実行となると大変難しいことです。お母さんの心が静かで温かく真底から賢明でないと出来ないことです。

このことは母親についても保育者についてもいえることで、その場しのぎのでっち上げでは、子どもの心が洗われた様に清らかに輝やくことにはないでしょう。

(東京家政大学)

# 私の幼児育論(一)

## ——依存と自律——

佐々木 正美

私自身、三人の子どもの父親であり、しかも最初の子どもが昨年の春小学校に入学したばかりである上に、わが家にはほかに二人の幼児がいる。

また私は、児童期から思春期にかけての精神医学を専攻する医者として、毎週七〇人前後の子どもとその家族の人たちに病院や診療所の外来や病棟で会う。そのうちの過半数は幼児であり、みんなそれぞれに、さまざまな形で心を病んでいる。医者としても父親としても、幼児の教育には強い関心をもたざるを得ない。

人間は「生理学的に未熟な状態」で産まれてくる。そのために無力で他に完全に依存した状態で生活を始めることになる。ということは、それだけ教育の可能性が大きいということになる。人間ほど教育の影響を受ける生命体は他にない。

新生児期から最初の一年間の乳児期は、子どもの依存要求が最も旺盛な時期である。そして、この時期の過ごしかたが、その後の幼児期はもとより、さらにその後の学童期や思春期に至る成長や発達のプロセスと内容に決定的に重要な意味をもつ。

乳児期から幼児期のはじめにかけての子どもは、自分のあらゆる欲求を満たすために母親の助けを必要とする。空腹、喉の渇き、寒さ、暑さ、孤独、不安などの苦痛を、どれひとつとして自分では解決できない。したがって、この時期の子どもに接する母親やその他の保育者の態度は、子どもの世界を、欲求の満たされる心地よい安全な場所にするともあれば、それとは逆に、泣いて訴えても欲求が聞き入れられず、不快で不安なところという潜在的な認識でいっぱいにしてしまうこともある。

生後、最初の一年間に形成される周囲への信頼感は、自己への



信頼すなわち自信の形成に不可欠な発達心理的な要素であり、この最初の時期を、他人や周囲を信頼することができないまま経過してしまつと、環境に対する不安や不信感とともに、自信のなさや無力感を育ててしまつて、その後の人格形成に訂正の困難な影響を残すことになる。

そのために、この時期の養育の課題は、子どもの欲求を的確に知ることである。赤ん坊の泣き声の意味を正しく理解しなければならぬ。その欲求を、できるだけすみやかに、そのまま満たしてやることである。

母性の豊かな有能な母親とは、子どもの泣き声などの欲求表現に敏感に正しく反応し、ミルク、濡れたおむつの交換、話しかけ、抱っこなどの欲求が満たされて、不安のない心地よさそうな表情や仕草を見せる子どもに接することで、激しい喜びを感じられる人のことであろう。

母性とは本能ではなくて学習の結果だといわれる。しかも育児における母性行動は、子どもの欲求表現によって誘発される要素が大きく、健全な母子関係は母と子がそれぞれに、心身ともに健康でなければ成立しにくい。

最近の若い母親に会っていると、子どもの欲求に鈍感であったり無関心であったりする人が、意外に多いという気がする。育児

以外のことに気持ちが行きすぎている。子どもが母親に対して全面的に依存した生きかたをしなければならぬ時期に、母親が母親以外の生活に気持ちを奪われすぎている。母親以外の生活がありすぎるといふよりも、母性を学習しそこなつてきたと思える場合が多い。

人間の胎児が四〇週間も胎内にいるということの意味は重要である。長い期間にわたつて、母親は胎動などに感じられる子どもの子宮内の発育をいとおしく思いながら、出産とその後の母親になるための心の準備をしていく。生まれてくる子どものために、手造りの肌着などを用意することは、母親に母性を育てるという意味では、極めて重要なことだと思ふ。デパートのベビー用品コーナーで、何でもインスタントに揃つてしまふことも、母親になるための心の準備を阻害してはいないかと心配に思ふ。また夫婦間のさ細なトラブルに、気をとられて、容易に母性を見失つてしまふ母親も多い。

私は自分の妻の妊娠中、家庭での雑談におりにふれて胎内の子どものことを話題にとり上げた。冬に生まれてくる予定の子どものことは、手編みのソックスや手袋やケープをつくつてみることもすすめてみた。東京のある日赤病院で、三人とも生まれたが、出産準備のための妊婦教室には、それぞれの妊娠中、休まず通ふこと

をすすめた。とくに長男と次男は一年四ヶ月しかちがわないう子であったが、二年続けて同じ教室に同じような話を聞きに行くことを妻にすすめた。やがて生まれてくるそれぞれの子どものために、母親としてその都度の心の準備が必要だと思ったからである。講義中に病院長は、見おぼえのある妻に気づいて、私たちの意図に感動的に賛意を表してくれたという。

生まれてきた子どもに対して、私たちは、最初の約一年の間は、子どもの欲求表現をできるだけ素早く理解して、そのとおり満たしてやるように全面的に心掛けた。深夜の授乳やオムツの交換、昼間の話しかけ、抱っこ、散歩など、子どもたちの要求に面倒がらずにどんどん応じてやった。いわゆる抱きぐせも大いにつけた。抱きぐせをつけると、将来依頼心の強い子どもになるというような短絡的な考えかたは、私は信じていない。むしろ逆である。早期に充分に依存的な欲求を満たしてやるのが、早い時期の自立や自律につながることを、私は多くの事例で学んでいる。周囲の人に対する基本的な信頼感を身につけることなしに、その後の自律感や自立心を獲得できるはずはないと思う。

子どもはその後の成長や発達の過程で、自分でできることが多くなってくる。それと同時に、母親やその他の養育者から、成長

や発達のために必要な行動の切りかえを要求される。

母親の乳房から直接授乳されたり、哺乳びんから飲んでいても、コップからミルクやフルーツジュースを飲むように教えられ強いられる。

やがて離乳がはじまり、スプーンで食物を与えられ、次いで自分でスプーンを持って食べることを期待され、箸を用いることも習わなければならなくなる。

母親やその他の人への依存をだんだん減らされ、自分のことは自分ですることを多く期待されるようになる。それまでの全面的な依存的な生活の内容が、母親たちによって少しずつ阻止されていくのだが、この依存から自律への過程は、それまでの甘えや依存の欲求が十分に満たされていなければならないほどスムーズにいく。自律をうながすために、子どもの甘えや欲求を制限しようとする人たちへの、基本的な（あるいは潜在的な）信頼感が培われているからである。

毎週病院や相談所で大勢の親子に会っていて、特に印象的に思うことは、最近の親は子どもに対して保護をし過ぎる上に、干渉をし過ぎている。

おそらく育児に関する情報がありすぎて、過剰な情報に振りまわされたり、その中で混乱したりしているのだろう。それと同時

に、母親に時間的・経済的ゆとりがあることも、時として災いになっている。さまざまな育児や幼児教育に関する情報の洪水の中で、ともすると知識的・観念的育児になりやすい側面と、経済的余裕からくる過保護、時間的余裕もたらす干渉などの育児に関する傾向が、現代っ子の情緒的・精神的発達を阻害する要因になっていることは否定できない。

私は子どもが一歳半になる頃から、すなわち依存的状态から最初の自律感を獲得する過程で、徐々にしつけに関する親の態度を明らかにしていく。そしてその際に最も留意することは、子どもに対する保護と干渉が過剰にならないようにすることである。

過保護や過度の依存状態にいつまでも子どもをおいておくことは、幼児の心に自主的で意欲的な態度を育ててこなることとなる。幼児期の後期から学童期に至っても、幼稚で非現実的な期待を持ち続けるために、周囲がそれに対応できなくなると、容易に慢性の欲求不満に陥る。そして、すねたり、ひがんだり、夜尿や指しゃぶりを繰り返したりして、情緒的に不安定な状態を続ける。

また一方、子どもの行動に対して過度に干渉したり、過剰の期待をすることも、自主性や自律感を育ててこなることになるので、私自身特に注意している。

しつけとは、社会的に認められる行動を教えることだが、そのことを子ども自身が発達の時期に合わせて理解できるように導きたいと思う。だから、しつけをされている過程で、子ども自身が社会的に承認される行動を発見していくことができるような育て方をしたいと思いつけている。この課題に、子ども自身が意欲的にとり組めるようになった時、はじめて子どもに自律性を育てることができると思うし、創造力への基礎を培うことにもなるのだと思う。

そのことは同時に、親の側からすると、子どもを望ましい人間に育てようとする働きかけであるが、そうだとすると、親のほうであらかじめ「望ましい人間像」に関する価値観をもっていないければならない。それがないと、その場その時で利他的で衝動的な干渉することになって、子どもに自主的な自律行動をとれなくしてしまい、潜在的な無力感や自信のなさを植えつけてしまいか、周囲に対する不信から、むやみや攻撃的な人格の芽をつくりあげてしまうことになる。

しつけをする場合に心掛けることは、どのような方法で子どもをしつけるかという技術的なことではなくて、明確な価値観や人間観に基づいて、どういうことを目標に育児をするかという基本的な姿勢をもっていることだと思っている。親がこういう基本姿

勢を欠いたまま、子どもの行動を規制したり、生活に干渉したりすることが、どんなに子どもを混乱させているかという実例は、病院や子ども相談室の窓口に数多くみることができる。

親の一貫性を欠いた強制や禁止などの要求が、衝動的・感情的に行なわれすぎると、子どもは自律的な主体感を育て得ないまま、怒りや攻撃的な感情を内在させ、意味のない反対や協調性のない行動が多くなって、家庭内ではもとより、保育集団の中など日常生活の種々の場面で不適応行動を起こしやすくなる。

ところが一方、怒りの感情を表現することも、反抗的な行動をとることも許されないほど完全に、強制的なしつけをされてしまっている場合もある。このように見事に極端なしつけが行なわれていると、子どもは表面的には非のうちどころがないように見えて、素直で礼儀正しい行動をとることができるが、親の顔や周囲の人の期待にばかり気を奪われて、自主的で創造的な行動がとれなくなる。

その結果、そういう子どもは、一見矛盾するような事柄について二者択一の判断をせまられるような場面では、強い不安に陥って不適応な状態を示すことになる。家庭内では、一応安定した行動がとれていたのに、保育園や幼稚園の子ども集団に入ったときに、自主的な言動がとれなくなって、頑固なかん黙や通園不能

な状態に陥ってしまうような場合は、その典型ともいえよう。

私が心掛けたい幼児期のしつけは、なんといっても子どもの発達や適応能力を注意深く見つめながら、子どもが新たな課題を与えられた時、かりに当初のうちは抵抗や拒否を示すようなことがあっても、結局は自ら意欲や誇りをもって行動できるように課題を与えて、無理な強制や服従を性急に強いることを避けて、子どもが新しい適応行動を学んで行く過程を、私自身が楽しみながら忍耐強く見守りたいと思うのである。この際、子どもがしつけと呼ばれる新たな課題の習得に、誇りと意欲をもってとり組めるように導くことに、私は最大の関心をはらいたいと思っている。

幼児期の育児に関して、そのかけがえのないはずの重要性が、時として意外なほど忘れられているのが「遊び」と「父親」の問題である。

次回はこの二つのテーマを中心に、私自身の幼児教育を考えてみたい。

(つづく)

(神奈川県・小児療育相談センター)  
東京女子医科大学小児科

# ルソーの夢

—むすんでひらいて考— (その六)

海老沢 敏

## 五、クラマーの《ルソーの夢》

前章に《グロヴ音楽辞典》第二版の《ルソーの夢》の項目を訳出紹介したが、この辞典初版にみられるグロヴ自身の説明には、第二版の「」内の説明が当然ながら欠けているほか、さらにいくつかの異同がある。そのひとつは第二版にみられる「この旋律は《村の占師》の第八場の《パントミム》に出てくるものであり、次のようなかたちである」という説明がないこと、したがって《パントミム》の譜例が掲げられていないこと。もうひとつ

は「《夢》というタイトルの由来は明らかでない」という最後の文章はなく、その代りに次のような文章が置かれていることである。「このエアがルソーのものかいなかを執筆者が確認していない。彼の《わが生涯の悲惨の》慰め》(パリ、一七八一年)には含まれていない。」

ここで参考までに、現在流布している第五版についても触れておこう。この版では、この《ルソーの夢》の項目は次のように修正されている。「十九世紀初期に英国で大いに人気であった曲。これは讚美歌の節として用いられ、それにもとづいてJ・B・ク

ラーマーがヘビオノ・フォルテのための主題と変奏曲、デラウエア伯爵夫人のために作曲、献呈……) (ロンドン、チャペル、一八二二年)を書いた。それは次のようなかたちをとっている(前章の譜例1)が、これは明らかにジャン・ジャック・ルソーの《村の占師》(一七五二年)のなかのさる舞曲の変形であり、《村の占師》では《ベントミム》のタイトルのもとに次の譜例のようになっている(前章の譜例2)。これが、一七六六年、ロンドンのドゥルリ・レイン劇場で《賢い男》のタイトルで上演された《村の占師》のバーニーによる翻案を介して英国に入ってきたことはほとんどたがいない。この曲はまた、以下の歌詞(これは譜例のリズムをわずかに変えている)がついた子どもの歌としても知られている。《おやすみ、私の幼な子お嬢さんのようにおやすみ／牝牛が戻ってきたら、ミルクがもらえるよ》

ちなみにグローヴの初版の当該巻は一八八三年刊、そして第五版は一九五四年の出版である。

これらグローヴの辞典の記述からおよそ次のような《ルソーの夢》のイメージが浮び上ってくるのだらう。第一に、すでに述べたように、この曲が、十九世紀初頭の英国で流行していたこと。しかし、《ルソーの夢》という名前ではじめて出てきたのはヨハン・バプティスト・クララーマーの変奏曲のタイトルだと思わ

れること(第五版をのぞく)。このクララーマーの変奏曲の出版年は一八二二年となっているが、それより四半世紀ほど前の一七八八年に、この曲の旋律の異稿が《メリッサ》というタイトルで出版されていること。この《メリッサ》の旋律は、グローヴ自身の調べでは、ルソーの歌曲集《わが生涯の悲惨の慰め》には見当らないこと。第二版以降の記述では、この《メリッサ》の旋律は《村の占師》の第八場の《ベントミム》に見出されること。《メリッサ》の旋律が英国に入ってきたのは、チャールズ・バーニーが一七六六年にルソーのオペラをロンドンで編作上演したことがきっかけであったと思われること。さらには、この旋律が讃美歌に改作されたか(第二版)、あるいは逆に讃美歌からクララーマーが自作の主題に取り上げた(第五版)こと。以後、讃美歌としてポピュラーになったこと。さらに子ども歌としても知られていること、以上である。

いずれにせよ、グローヴの辞典のこの項目の中心に据えられているのは、《ルソーの夢》なるタイトルをもったクララーマーのピアノ変奏曲である。私たちも、まず、この作品に一瞥を加え、その上で、そこを基点として、史的な探索を試みてみよう。

ヨハン・バプティスト・クララーマー(一七七一一—一八五八)は、マンハイムで生れ、ロンドンに没したヴァイオリン奏者ヴィ

ルヘルム・クラマー（一七四五——一七九九）の長男であり、おなじくマンハイムに生れ、ロンドン（ケンシントン）、世を去ったピアノ奏者である。彼の名は、現代の私たちには、おそらくはもっぱらヘクラマー＝ビュローウで知られているといえよう。これはクラマーの《練習曲集》をドイツの音楽家ハンス・フォン・ビュローウが編曲刊行し、これがピアノ学徒にとって欠かせない教則本となったものであり、音楽の専門教育界ではまことに名高いものであったからである。

そのクラマーは幼くしてロンドンに移り、カール・フリードリヒ・アーベル（バッハの末子ヨハン・クリスティアンの同僚としてロンドンで活躍し、モーツァルトにも影響を与えたドイツ系音楽家）やムツィオ・クレメンティ（モーツァルトと競演したこともあるイタリア系ピアノリスト・作曲家）などに学び、はやくも十歳で公開演奏の場に登場し、以後、長年に亘ってピアノのヴァーチュオーソとして活躍した存在であった。ロンドンを舞台としてはなかなか演奏活動を試みたばかりか、しばしば大陸でも演奏旅行をくりかえし、その名はヨーロッパ各地にあまねく知られた。ヨーゼフ・ハイドンとも親しく、また同世代のベートーヴェンとも近しかった彼は、十八世紀末から十九世紀初頭にかけて、ロンドンのピアノ教育界にはなくてはならぬ人物であり、多

くの教則本を刊行したばかりか、協奏曲、室内楽曲、そして独奏曲などまことに数多くのピアノ作品を残している。彼のピアノ協奏曲四およびピアノ・ソナタ（二〇五曲も数える）はヴァーチュオーソとしての彼の欠かせぬレパートリーであったし、彼が残したこれまた無数の小品は、専門のピアノ奏者たちのレパートリーであったとともに、ピアノの演奏をたしなむ音楽愛好家たちの愛好曲ともなったのだ。

クラマーはまた楽譜出版者としても知られている。彼は一八二四年、J・B・クラマー社を設立しているが、これに先立って、一八〇五年ごろ、クラマー・アンド・キーズ社の共同経営者であり、かつ、一八一二年には、英国の著名な音楽出版者サムエル・チャペルのパートナーとなっている。《ルソーの夢》は、このチャペルからおなじ年に刊行されているのである。

すでにグローヴの辞典の項目でも紹介したように、クラマーが作曲したこの作品のタイトル・ページには、ヘルソーの夢。ピアノ・フォルテのための主題と変奏曲、J・B・クラマーにより作曲され、デラウエア伯爵夫人に献ず。ロンドン、楽譜楽器商チャペル社印刷・販売、ニュー・ボンド・ストリート二四番地と印刷されている。（注上）（図版1）

（注一）《Rousseau's Dream. An Air with Variations for the

Rousseau's Dream.

An AIR with

Variations

for the

PIANO FORTE.

Composed and Dedicated to

THE RIGHT HON.<sup>ble</sup>

The Countess of Leinster

BY

J. B. CRAMER.

London

Eng<sup>l</sup> at Sta Hall

110-3

Printed & Sold by Chappell & Co. Music & Musical Instrument Sellers.

124. New Bond Street.



Piano Forte. Composed and Dedicated to the Right Honble.  
The Countess of Delaware. By J.B. Cramer. London. Printed  
& Sold by Chappell & Co. Music & Musical Instrument  
Sellers: 124, New Bond Street.》

この曲は、このチャペル版の初版が発売されてから、十九世紀一杯にかけて、まことにポピュラーな愛楽曲となり、英国ばかりでなく、ヨーロッパ大陸、とりわけフランスとドイツで大いにもてはやされたものと思われる。なぜなら、各種の文献目録あるいは図書館所在目録にみるかぎり、そして私自身の調査によるかぎり、主としてドイツおよびフランスの音楽出版社が競って、この変奏曲の楽譜を出版しているからである。ドイツの著名な出版社ブライトコップフ・ウント・ヘルテルあるいはジムロック、そしてフランスのジャネ・エ・コテルをはじめ、ルモワース、コスクラ、ウジエル、ジュベール等々の名を挙げるだけで十分であるう。

これほどにも十九世紀にもてはやされたクラマーの《ルソーの夢——主題と変奏曲》は、それではいったいどのような作品であるうか。つづいて、この曲の特徴を簡単に説明してみることにしたい。

曲はまずアンダンテ・ノン・タント、八分の六拍子の〈導入

部〉で開始されるが、〈長調をとるこの曲の曲調が、この〈導入部〉ではっきりと提示される。やがて提示される主題の動きを予感させるような調へが、技巧的なパッセージを喜んで奏され、最後のカデンツァ風のパッセージでしめくくられる。

そして《ルソーの夢》と英語で題書された主題（アリア、モデラート）は、〈長調、二分の二拍子をとる、譜例1（次頁参照）のようにもたらされるのである。私たちになつかしい〈むすんでひらいて〉の旋律は、こうしてクラマーの手で、このようなかたちで音楽史にその姿を刻んだのである。この主題の音楽的特徴やその後のこの旋律の異稿との比較については、さらに後章にゆだねなければならないが、装飾的な分散和音によってはじまり、三度や六度の音程関係を維持して進むこと、いずれも繰り返される四小節および八小節の二部分からなるものながら、音楽的にはA—B—Aのかたちをもっていることなどが指摘できよう。さらに曲調は〈長調という調号との関係から、のどかさ、のびやかさ、そしてかろやかさといった性格があらわである。

さて、この《ルソーの夢》なる主題にもつづいて、つづいて合計一〇曲の変奏曲がクラマーによって作られている。第一変奏は、主題がオクターヴ高く奏され、かつタンソその他装飾的な動きが加えられている。第二変奏は右手の十六分音符のこまかな装

ROUSSEAU'S DREAM.

ARIA  
MODERATO

The musical score is written for voice and piano. It begins with a vocal line in the treble clef and piano accompaniment in the bass clef. The tempo is marked 'MODERATO'. The key signature has one flat. The score includes several variations:

- Var. 1:** Features a more active piano accompaniment with sixteenth-note patterns. The vocal line continues with a melodic line. A 'Soft Pedal' instruction is present in the piano part.
- Var. 2:** Shows a further development of the piano accompaniment with a 'dim' (diminuendo) marking.
- Var. 3:** Features a complex piano accompaniment with rapid sixteenth-note passages and a 'rit.' (ritardando) marking.

The score concludes with a final vocal phrase and piano accompaniment.

▲ 譜例 1

飾的動きの中に主題が立ち現われ、一方、左手はこれに対位的な動きをひくく添えていく。そして第三変奏。スケルツァンドと、いくぶんおどけたスタイルで書かれたこの変奏は、三連音とスタッカートが組み合わされて、これに対応する左手の動きの中で、主題が変形されている。第四変奏は右手が高く奏するトリルや左手のひくくうなるような六連音の動きの中で、もう一方の手が主題を忠実に歌っていくかたちがとられている。

第五変奏は三連符の三度音形が右手で奏され、これに左手が合の手を入れるのである。第六変奏は右手が高い音で、休止符をさしはさんだかろやかな音形を奏していく形がとられる。第七変奏は右手と左手が織りなすこまやかな織り物である。そして第八変奏はヘコン・グラーツィア（優美さをもって）で、三度と六度のかろやかな音形が奏される。第九変奏では、左手のスケールに乗って、主題がフォルテで奏されるが、最後の第一〇変奏になると、アレグレット、八分の六拍子とられ、三度音形とこまやかなパッセージが交替し、最後は技巧的なパッセージが、この変奏曲全体をしめくくるのである。

一般にこうした変奏曲では、一曲は短調、いわゆるミノーレの変奏曲がさしはさまれていて、全体の印象に影を含む工夫がこらされているが、クラマーのこの作品では、短調の変奏曲がな

く、したがって、作品全体も、主題ののびやかな印象を、くりかえしくりかえしひたすら敷衍するのみである。この作品が、十九世紀のヨーロッパの音楽的な家庭でひろく愛弾されたのは、この曲につけられた「ヘルソーの夢」というタイトルが与えるさまざまなイメージともどもに、とりわけこの曲のかるやかでのどかな情調が抵抗なしに受け容れられたからではないかと推察されるのである。

このクラマーのピアノ変奏曲は、こうして、十九世紀の十年代の音楽界に姿を現わし、その後も愛奏されて、ひろく人口に膾炙したものであったが、<sup>(注2)</sup>それにとどまるものではなかった。しかし、ここでは、クラマーが主題として取り上げた「ヘルソーの夢」の旋律のその後の命運を辿っていく前に、グロウヴの辞典で取り上げられていた異稿としての「メリッサ」など、この旋律の前身や由来についてまず語らなければならぬだろう。

(注2) このクラマーの「ヘルソーの夢」変奏曲の日本における初演は、昭和五十三年十月二十八日(土)に東京のヤマハホールでもよおされたルソー没後二〇〇年記念演奏会(音楽家ジャン・ジャック・ルソーの夕べ)(昭和五十三年度文化庁芸術祭参加)で、小川京子のピアノ独奏でおこなわれた。

(国立音楽大学)

大人になってゆく子ども

## 成長発達のリズムと教育(中)

伊藤隆二

——思春期以後——

### 十五歳以後の成長発達を考える

卵—幼虫—蛹—蝶という変化発展過程をモデルにおいて人間初期の成長発達を追うと、誕生から三歳ごろまでは「卵」、三歳ごろから十五歳ごろまでは「幼虫」、十五歳ごろから十八、九歳ごろまでは「蛹」、そして十八、九歳ごろから「蝶」に変態し、「社会」という名の広い世界へ飛び立っていく——とみることができるようである。

「卵」の時代は養育者との共生を中心にすえている。「幼虫」の時代は集団参加を通して、外界へむかう限らない活動を中心にすえている。では、「蛹」の時代はどうであろうか。私見では、それまでの活動をとおして仕入れた諸々の情報を整理し、さてそれをどうまとめるか、また将来にむけてどういかしていくかといったことを思索するときだと、考えて

いる。外界へむかっていた限らない活動はやや鈍り、子どもたち（いや、もう青年とか若者とよぶべきだろう）は、自分以外の対象にむけていた関心を、自分自身の内面世界へむけていく。かれらは文字どおり、蛹のように「自分の世界」という殻のなかにとじこもり、じっと身動きしなくなる。とくに、親の干渉をきらう。へたに干渉すると猛然と反抗することもある。一日中、自分の部屋のなかにとじこもっていることも珍らしいことではない。

肉体的には、もうおとなの水準に達した息子が一日中、ものもいわず、じっと部屋にとじこもっているのを見て、ある母親は「自分の子どもながら、薄気味が悪い」という感想をもらしているのをきいたことがある。

また、衝動的とでもいうべきか、かれらは突如として、ボリュームいっぱいあげたジャズ音楽にききほれたり、ある

いは戸外に飛び出して猛烈なスピードでオートパイをとほしたりすることもある。

「蛹」の時代の若者は、一見、心静かな、平安なときを過ごしているようにみえるが、決してそうではない。心にはたぎるような何かを感じ、何かをしようと疼いているのである。

この衝動的ともいえる暴発行動をみて、「疾風怒濤」と表した人もいる。では、かれらは何を感しているのだろうか。

それは空高く飛翔している自分の姿かもしれない。あるいは寝食を忘れてライフワークにとりこんでいる自分の姿かもしれない。何かとは文字どおり「何か」であって、自分でもわからない。その苛立ちのために若者は腕くのだ。

そのようなわが子の姿をみて、親は困惑する。オロオロし、やがて何とかせねばならないと、いらいらする。しかし、そのような親の態度は禁物なのである。V・E・フランクはいった。「心に悩む人間は『苦悩する力』をもたねばならぬ。意味のある悩みをもつ人にふさわしい命令は『あえて苦悩をもて』である」と。

その苦悩の体験から、かれらは新しい自己を（いや、正しくは本来の自己を）、そして新しい世界をつかむのだ。

親に必要なのは唯ひとつ——わが子をあたたく見守るだけなのである。（ちなみに、漢字で「親」は「木の上に立って見る」と書く。それは子どもを見守っている姿をあらわしている。）

「あたたく見守るということとは？」ときかれれば、私はそれは子どもにとって家庭が心の安らぎの場になっていることだと、答えることにしている。「では、その条件は？」と重ねてきかれることが多い。わかりきったことであるが、両親が仲睦まじいことに尽きるのではなからうか。

そういえば、両親は大学を卒業したインテリで、どちらも子どもの教育には熱心なのに、相互に何かしっくりいっていないという場合、「蛹」からぬけ出た若者は、いつまでも強い不満を残すようである。とくに、乳幼児期から、間違った早期教育（即効型の、また子どもの成長発達のリズムを無視した教育のこと）をうけて育った若者の場合、この十五歳すぎたころに、その弊害が集約的にあらわれてくるという印象を、私はもつ（成長発達のリズムと教育（下）参照）。

両親が仲睦まじい関係にあるということは、もちろん愛情深いということに他ならないが、そういう家庭は穏やかなというか、落ちついた雰囲気につつまれ、家族は正気で、生活し

ているものである。正気、でというのは気狂いじみた刺激にふりまわされるということと正反対である。

ところがこういう家庭があるとすると。外からはジェット機の爆音、拡声機や自動車やオートバイの騒音が一日中、侵入してくるし、家のなかはなかで、ラジオやテレビはつけっぱなし——そのテレビはどぎついコマーションと、殺人場面をこれでもか、これでもかとうつ劇映画、愛憎葛藤だけの、何のストーリーもないドラマ、それに勝った負けたのスポーツばかり。そのうえ、実物である両親が顔をあわせればいつでもケンカ、不平不満のいがみあい……ときたら、果して若者たちはどうやって心の安らぎを得たらよいだろうか。そうして心身ともに疲労困憊しているところに、さらに両親から追討ちをかけるように、こまかいことまで、いちいち干渉されたら、どうだろう。まさに一触即発、かれらはカッとなつて、短絡行為をすることになるのではなからうか。

私は外国で生活した経験をもつが、文明の進んだ国では、幼稚園でも高校でも、瞑想するための部屋が設けられ、生徒たちはその窓のない、長椅子がおいてあるだけの部屋に、たったひとりで、一時間でも二時間でも、静かに心を休めてい

ることが多いことを知った。あるとき、アメリカのある高校で、校長先生とよもやま話をしていたとき、たまたまこの瞑想室のことが話題になったが、かれはこんな話をしてくれたことを、今思い出す。

——今、アメリカ合衆国はノーベル賞の受賞者の数は世界一多い反面、犯罪者やアル中患者が多いといつて、世の非難を浴びている。くわしく調べたわけではないが、学問的にも立派な業績をあげているだけではなく、人格面でも高貴な人物になっている人のなかには、高校時代に、よく瞑想室にいらしていたというのが多いが、逆に、瞑想室にいくどころか、ひまさえあれば、ジャズ音楽に浮かれ、なんでも騒々しいことの好きだった人は、社会に出てから、他者に迷惑をかける行為をする者が多いという印象をもつ。やはり、思春期ごろからは若者には、静かな雰囲気が必要である——と。

さらにこのことにつけ加えねばならないのは、今の若者たちが過してきた過去に、かれらが野や山にじかにふれたという原体験（テレビ、映画、漫画、それに、こ、と、ば、をとおしたものは映像体験となる。原体験とは異質）がすっぽりぬけ落ちていたという人が多いということである。そのためだろう、かれらには自然そのものへの畏敬の念というか、情感という

か、人間の潤いがないしは慈みといったものが、はなはだ希薄なのである。

私は、「幼虫」の時代から、自然ではなく、ことはや映画（テレビ）や機械音をたっぶり吸収してしまおうと、思春期以後になって、自然を見る目がにごってしまっているのではないかと、みている。

小林秀雄が『美を求めぬ心』のなかで、「ことばは眼の邪魔になるものです」と述べている。「たとえば、諸君が野原を歩いていて一輪の美しい花の咲いているのを見たとする。

見ると、それは葦の花だとわかる。何だ葦の花か、と思った瞬間に、諸君はもう花の形も色も見るので止めるでしょう。

諸君は心の中でお喋りをしたのです。葦の花ということばが、諸君の心のうちに這入って来れば、諸君は、もう眼を閉じるのです」と。全くそのとおりだと思う。にもかかわらず、幼いときからことばの勉強が強いられている。わが子がことばが一つでも多くおぼえてほしいと、親は願う、そのうえ、自然のひとかけらもないコンクリートのうえで、映像と機械音だけにかこまれて大きくなっていく今の子どもたちの将来は、いっそう暗いのではないかと、杞憂される。

## 二十七歳ごろが危機だということ

頭脳のはたらきからみる限り、十八、九歳ごろから二十七歳ごろまでは、七十数年間の生涯のなかでも、もっとも生産的な時期だといえる。とくに理数系の方面で大きな業績をあげた人の多くは、この時期に、その萌芽が明確にみられることが多い。また、詩、小説、評論、絵画、音楽、演劇などの面で新境地をひらくのも、この年齢段階であることが多い。まさに「蝶」の時代というにふさわしい。

その柔軟でみずみずしい頭脳は相応きびしい鍛練にもたえうるし、また、この時期にこそ、おおいに鍛えるべきでもある。逆に、この時期に怠惰な生活にあけくれていると、せっかくのその人の才能も天分も、花ひらくことなく、中途半端な（いつも腰かけ的な）人間として生きていくことになる。

二十七歳ごろを成長発達の「節」として区分するのは、一般的にいえば、二つの理由による。一つは二十七歳ごろまでに大抵の若者（統計のうえでは、男子の七五％、女子の九五％）は結婚し、子どもをもつ、つまり親になるということ、もう一つは社会人としても職業に就いたかれらは軌道に入り、その仕事をもっとも快調にこなしているのが二十七歳ご

ろであるというのが、それである。

したがって、七十数年という「生涯」（という長さでいうと）の約三分の一のところにあたる二十七歳ごろは、すべての面で登り坂の最中にあるとみられやすい。

ところが、私が二十七歳ごろを一つの重要な「節」と考えるのは、この登り坂の最中にある前途有望な人たちのなかに、自分の将来に絶望し、いわゆる鬱状態に陥る人が少なからずいることに注目するからである。信頼のおける統計は、残念ながら手元がないが、私が見聞するところ、二十七歳ごろが「鬱」のはじまる時期で、それがもつとも深刻になるのが三十三歳ごろであるというのは、間違いなくいえる。その理由は定かでないが、鬱状態に陥っている人たちの相談のつたり、文献で調べたりしてみると、かれらは「一流」といわれる大学を卒業し、その後も社会的にみて、なんの不満も見出せない地位についている場合が多いことがわかる。しかも、「一流」といわれる大学にはいたのであるから、頭脳はすぐれていたはずであるし（とはいっても、その場合の優秀さというのは頭の回転がはやいとか、巧みにきまっただ答をあてるといふ意味であるが）、そのための受験勉強にも熱心にとりくんだものと想像される。

ここに掲げるAさんの場合は、一つの例にすぎないが、かれは三、四歳ごろから教育熱心な母親の要求にしたがって、近所にある英才教育をめざした塾に通い、読み書き算数をはやくから教えることで有名な幼稚園を出て、小学校入学後、高校卒業まで、学校ではいつもトップクラスに属していたという。両親には口ごたえ一つしたことがない素直な子どもであったAさんは、望みどおりの「一流」大学を出て、大手の会社に入社したのは、今から五年前であった。そして、今は掛長の地位にある（何の不満もないようにみえる）中堅の一人となっているのに、半年ほど前から、夜間ときおりおそってくる頭痛に悩まされ、寝不足のために、朝起きが極端に悪いと訴えている。一昨年、同僚だった美人と結婚し、今は一子の父親になっているのに、家庭に帰っても心が安まらず、あの素直だったAさんは奥さんに八当りすることが多くなったのだ。会社の同期生は六十人ほどいたが、掛長の地位をえたのは、わずか七人しかいないのであるから、かれは前途を見込まれている一人であることがわかる。しかし、かれの頭痛の原因の一つは、いつも後輩からの追いあげと、さらに高い地位への目に見えない「這いあがり」競争のために、焦燥感が昂じ、毎日、緊張のしっぱなしであることが考えられ



る。そして、その緊張感から解放される日曜日には、ふつうは心がなごむものなのに、Aさんの場合は逆に、競争の渦中に生きる毎日の自分がよく見えてきて、やりきれなくなるといのである。同時に、いつかみんなに立ち遅れている自分の姿を想像し、愕然とすることがあるともいいう。

これはAさんに限ったことではないだろう。「地位」争奪戦のはげしい大手の会社や役所に勤める人たちは、たえず上司の評価を気にし、一刻も心が安まらないのである。その緊張疲れが、どっと出てくるのは二十七歳ごろだと、私は推察している。つまり、あまりに幼いときに、エネルギーを使いすぎて、肝心の働き盛りのときに、アゴを出したというべきか。そして、それを無理しつづけると、三十三歳ごろに、真性の鬱病にはまりこんでいく……。

女性の場合、それまで無我夢中で育児や家事にとりこんでいたのが、ふと一息ついて、自分の来し方行、末を思いめぐらす余裕ができるのが、三十三歳ごろである。

子どもは学校に上がり、夫も地位が安定し、さて自分自身の生き方を見つめようと思うのだが、自分には何も、ないことに、今さらながら驚いたという女性もいる。とくに、幼少期

から、何の不自由もなく、「蝶よ花よ」と育てられてきた女性が三十三歳ごろ（女性の厄年と一致する）に、一つの大きな転換期を迎えることは、昔も今もかわらないようである。

その点、かえって幼いときから苦勞を重ね、自分を見つめることの多かった人の場合は、この厄年をスムーズに通過すると、説く人もいる。その真偽を確認するためには、幼児期からの長期にわたる縦断的な研究が必要であろうが、それはともあれ、幼児期の（私のいう「幼虫」の時代の）生活体験なり、生き方なりが、十八、九歳以後の「蝶」の時代まで、何らかの形で影響を及ぼしていることは否定できないだろう。

さらに厳密にいうならば、誕生から三歳ごろまでの「卵」の時代の、養育者との人間的なかわりあい、その子どもの生涯のかなりの部分の基底要因となっているという仮説も、説得力をもつ。なぜならば、養育者が他者との競争にうちかつことで、子どもの幸せが実現するという考えをもつか、その人らしい生き方をするのがもっとも幸せだという思想をもつかということ、子どもへのかかわり方は、根本的に異なるからである。

では、子どもにとって、望ましい教育のあり方とは、どのようなものだろうか。|| 以下次号 ||

（神戸大学）

## 『復刻・幼児の教育』

### 〔趣旨〕

『幼児の教育』は、明治三十四年に『婦人と子ども』と題して創刊されて以来、わが国の保育の発展と歩みをともしてきた。その後今日に至る七十余年の間に、この誌上で発表された記事や論説は、保育理論の先駆的な役割を果たし、わが国の幼児教育の発展に寄与するところ大であった。また、雑誌出版史上においても、現在まで継続する最古の月刊誌のひとつである。

本雑誌の戦前版は、月刊誌という性格上、また震災、戦災による焼失が相まって、今日では研究機関ですら、完全な揃いは皆無であり、研究者が容易に閲覧できない現状である。一昨昨年の幼児教育百年、今年の国際児童年と、幼児の問題に対する一般の関心は、著しい高まりをみせている。

この機会に、わが国の幼児教育の進歩の様相を目のあたりに概観する好個の原資料として、また先覚者たちの抱負と熱意の結晶する稀有な文献として、同誌戦前版を復刻刊行する。

### 〔体裁・内容〕

全三〇巻、別巻一、A5判、クロス装、外函入、題字・東山魁夷、別冊記念論集

〈一卷〜二〇巻〉『婦人と子ども』明治三十四年〜大正九年

※わが国幼児保育の普及期

※一年分を一巻に合本。各巻平均六百頁

○表表紙から裏表紙まで、広告頁も含めて、完全に複製する。

○色刷の表紙も、できる限り近い色で再現する。

○写真印刷上、出にくい文字部分の一部修正のほか、原則として原本に手を加えない。

○今回の複製を第一期とし、時機をみて、残りの戦前版部分を第二期として刊行する。

〈別巻〉二八〇頁程度

・ 解題 『『幼児の教育』戦前版について』

・ 東基吉・倉橋惣三の関係論攻

・ 総目次 戦前版すべての目次を収録

・ 年表 幼児教育百年史

〔刊行〕 名著刊行会

〔予価〕 現金価格 一八〇、〇〇〇円

〔申込・問合わせ先〕

総発売元・株式会社コーディック

東京事務所 東京都千代田区神田神保町一―四七 大森ビル

TEL 東京 (〇三) 二九四―三八六五

本社 大阪市東区今橋二―二二 藤浪ビル

TEL 大阪 (〇六) 二二七―五三四一 (代)

## 一つの疑問と一つの提案

太田 茂行

### 〈疑問〉

幼児の教育に携わるもの一人として、大きな疑問に思うことがある。それは子どもたちが一日中自由に遊んでいられる幼稚園が、なぜこんなに少ないのだろうか、ということである。これは、いわゆる一斉保育（または課題保育）か自由保育かという面倒くさい、「えっらそーな」問題意識からくる疑問ではなく、子どもたちが熱中して遊んでいる姿を見ていて自然に湧いてくる素朴な疑問なのである。

道路でも、電車の中でも、公園でも、団地の階段でも、まったくいたる所で遊んでいる子どもの姿を見る。一心不乱に喜々として遊んでいる子どもたちを見るにつけ、「子どもってというのは本当によく遊ぶものだな。」「遊ぶというのは子どもの生命そのものじゃないかな。」と思ってしまうのである。これはもう、私の実感なので如何ともしがたい。別の言い方

をすると遊びは子どもの生活の糧であるとならうか。

遊びが子どもたちの生活の糧であると感じると、子どもたちの生活を豊かにし、肥やし、大きく発展させてやるには、（これはすなわち子どもの成長発達を保障する、援助する、ということだが）子どもたちの遊びを大切にすることということが王道だと、どうしても思うのである。

幼稚園というものが、子どもたち一人々々にとって最も魅力ある遊び場に徹し切らないのは全く不思議なことである。

大ていの幼稚園には、こまごまとしたそれこそ幼稚園なルールがある。朝、登園すると会社のタイムレコーダの原型のようなシール貼り。みんなで体操。天気がよくて跳びはねたいような日和でも、お集まり。降園時間でもないのにお片付け。折り紙したり、お遊戯したり、お話を聞いたり、駈けっこしたり、一見楽しい遊びふうのことも盛り沢山。けれども、それらは先生によって「みんながやらなきゃいけないこと」「みんながやるべきこと」として前もって企まれたことで、時間決めの定食といったようなものが殆んどのである。

それでも、大ていの子どもたちは「ようちえんはたのしいよ」と言うのである。何とけなげで哀れな話だと思うのである。こちらの頭には、幼稚園以外のところで、キラキラとまた激しく自分の遊びに取組む子どもの姿の方がしっかりと焼付いているから、「ようちえんはたのしいよ」という子ども

の目を思わず覗きこんでしまうのである。

〈提案〉

自由と放縦はちがうとか、先生の教育的関わり云々とか、心理的食わず嫌いを助長してはいけないとか、小学校入学までに最低の知識云々とか、文部省の六領域がどうのこうのといった観念的で徹頭徹尾おとな側の論理や理くつを一度あつさり捨ててみてはどうだろうか。そうして、最低一か月、できれば一学期間位は幼稚園を子どもの最高の遊び場として解放してみてもどうだろうか。時間決め定食といったカリキュラムは一切取下げ、遊びの材料となるものは用意するが、その調理方法と食べ方は一切子どもたち一人々々に委ねる。

先生方は、どの子どもも楽しく充実した生活を送ることだけを念頭におく。そのことだけを念頭において、それぞれの子どもが自らくり広げる遊びを見守り、また仲間入りする。

こういった試みを先ず行なうから、先述の大人側の論理、問題提起について先生どうし、あるいは保護者も含めて話し合ってみても決して遅くはあるまいと思う。幼稚園は義務教育ではない。だから小学校教育における指導要領のように先生や学校の方針、試みを外的に規制するものはない。あるとすれば、それは未経験なことに直面するという先生方の不安（それはふつう教育観により武装される）ではないだろうか。一日中子どもたちを遊ばせておいたら収拾がつかなく

なるのではないか、その場で自分が具体的にどのよう動いたらいいのだろうか、保護者からの信用を失ってしまうのではないか、と不安が生じてくるだろう。

しかし子どもにしてみれば、遊びに徹するということは未経験であるどころか、暇さえあれば子どもたちは遊びに徹せん、としているのである。そういう姿が道端や公園でくり広げられている。確かに百人から二百人の子どもたちが一斉に遊びだしたら、ケンカやケガも増えるし、先生の気付かぬことも数多く起るだろう。しかしそれを「收拾がつかない」と把握するのは正しいだろうか。もっと子どもの活動に信頼をおくことはできないだろうか。何よりも子どもたちは遊びのプロなのだから。

また、その場で自分が具体的にどう動いたらいいのか想像もつかない、という不安に関しては、次のように言えないだろうか。すなわち、どうしたらよいかわからなければ、子どもがそれを教えてくれる。ということである。

一日中遊んでいられるとなれば、子どもたちは即座に色々なことに取組むだろう。そうして先生にも実に様々な働きかけや誘いかけ、要求をしてくる。先生に対して、子どもの方から「こうして欲しい」と語りかけてくるのである。それは画用紙がほしいという簡単な要求であったり、今の自分の悲しい気持ちを分ってほしい、支えてほしいという声にもならないまなざしによるむずかしい訴えであったりするだろう。そ

の一つ一つに丹念に應じていくこと、それが先生の動きかたになるわけである。これは時間決め定食といえるカリキュラムを通じて、専ら先生が子どもたちに働きかけ、要求を出している保育形態での先生の動きと全く異質なものとなる。従って、子どもと先生の間でもたれる経験も全く異質なものとなり、お互いにそれまで気付かなかった面に触れることができるようになるだろう。先生の側からみれば、子ども観が変わるといふことも起こり得よう。

三番目の不安、すなわち一日中子どもを遊ばせておくような幼稚園は保護者の信用を失うのではないか、という不安は最も強いものかもしれない。しかし、子どものよりよい生活、よりよい発達成長を願うその実現に努力する、ということが親と先生の共通の目標として確認されるなら、この不安も越えられない程のものとはならないのではないだろうか。

第一に、現在の多くの幼稚園で行なわれている時間決め定食型の保育形態が、絶対的に正しいとされる根拠は実はどこにもなく、一日中子どもたちが伸び伸びと遊んでいる幼稚園も少数ながら存在しているのである。また、諸外国の幼児教育の紹介も様々な保育形態のあることを教えている。

第二に、一日中子どもたちが遊ぶ場所として幼稚園を解放する、といっても保育時間には変更を加えないのだし、当初はせいぜい一か月から一学期間程度の短期の試みとしてのな


である。保護者との十分な話し合いは、この試みを終えた後で初めて実りある具体的な（すなわち、観念的、教育論的なものでなく、この試みを経験した子どもの変化に中心をすえた）ものとなるだろう。


最初はこの試みに反対していた人が、終わりには支持者になるかもしれないし、子どもの教育に絶対的な自信をもっていった人がその自信を失うかもしれない。またその反対のことも起り得よう。これは親にも先生にも起り得ることだろう。しかし、子どもはより生き生きとなり、輝きをました目をもつことになる。より子どもらしい子どもとして、ぐんと力強さをますことになろう。「ようちえんってほんとうにすてきだ」と身体中で表現するだろう。このことを私は断言できる。おとなたちは子どもたちのよりよい成長発達という願いを持ち続けていればこの試みを通しての自分の考えの混乱や、それまでの経験との落差を、ただこの子どもたちの変化という一点から捉え直す必要を感じるだろう。

以上、ささやかな文章ですが現在の「普通の」幼稚園に対する私の大きな疑問と一つの提案を記してみました。たった一つの園でも一か月または一学期間の「冒険」をする勇氣をもって頂ければこれ以上嬉しいことはありません。

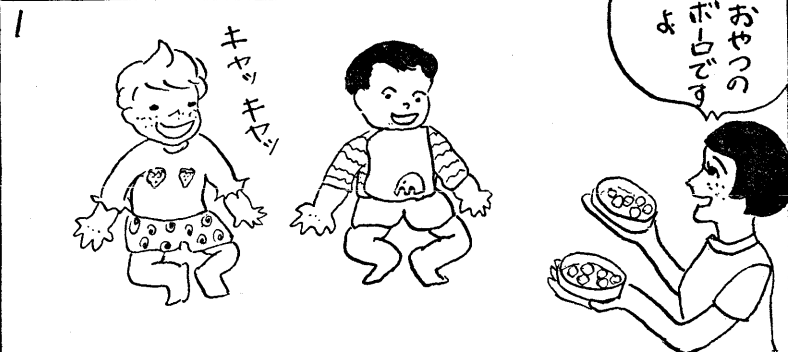
（愛育養護学校）

# わたしの 保育日誌

 は生まれて8ヶ月

 は生まれて6ヶ月

おおたるみ



# 保 育 随 想

幼稚園から

家庭へ

大 下 祥 子

一〇年余の幼稚園での生活から、家庭に入り一年半、幼児教育とはすっかり縁が切れてしまったはずの私が、自分の息子を育てることにより、再びその世界に、首をつっこむことになりそうである。

幼稚園を辞した当時は自らの力の無さにより、幼児教育について疑問ばかりが残ってしまった。

○幼児教育そのものにと

○教師自身のこと

○作られた不自然な集団

への疑問

○集団教育の開始時期

○費用の莫大さ 等々

今思い出しただけでも、こんな具合である。私自身の拙い経験から感じたことではあるが、母親となってみると、幼児教育についての思いを變更せざるを得なくなってきた。私的な考えであるし、これからも息子の成長に従って立場が移り変わると共に変わるであろう。今は、息子との一年間の付き合いを通して幼児教育をみてみたい。

## 人間になっていくということ

息子は満一歳になった。まだ付き合って一年にしかならないが早いものでだんだん人間らしくなってきた。誕生時から頑固な子で、新生児室の中で誰よりも大きな声を常にはりあげていた。もちろんこれによって、性格、人間性を決めてしまいうわけにはいかないが、その時はつくづく気の強い子だと思っていた。

両親の食事中、彼は一人サークルの中で遊んでいる。うぎぎの人形を見つけ、耳にリボンをはめようとする。うまくいかない。何回か試みていたがあきらめた。

——この子はまだ性格がはっきりわからないネ——

——あきらめは良い方だと思うけど、ミルクを欲しがる時はかなりしつこいし……と父親。

比較する子どもがいない為、赤ん坊とはこんなものとしごくあ



っさり構えている母親に、

——この位の時期は、母親のかかわり方で性格は作られていくの  
だろう——と父親は一人つぶやく。

この一年、無我夢中、短い一年であった。けれど息子にとつては、大人の何十年にも匹敵する程の大切な一年だったはずである。一日一日が、人間として成長していく訓練の場である。何をボヤボヤしていたのか、私の様に呑気に構えていると、反省ばかりということになってしまふ。これからも、今まで以上に母親とのかかわりを基にして、子どもの人間作りが成されていくのだろう。誰にも責任転嫁のできないものを母親は負わされているのである。

### 息子は天才

一年前、おっぱいに吸いつくのもやっと。度々大声を出して泣いていただけ。冗談に、犬の方がまだましネ、と言ったものだが、もう、大人の言うことが少々理解できるようになってきた。気持ちを通じ合うようになってきた。芸も少々できる。食事の時間がくると、おばあちゃんの部屋の前まで呼びにいき、そのあと、自分の食事の椅子に、チョコンと座って待っている。こんなことをと笑われるかもしれないが親にとっては驚きであり、喜びなのだ。

である。何か一つでも出来る時、天才になってしまう。私の息子に限らない。幼稚園の子ども一人が、その天才の集まりだったのである。この年齢では、これができるのが当たり前ではなく、皆それぞれこんなことまでできるようになってきた子ども達なのである。

### 幼児教育にのぞむこと

息子はまだ周囲との関係はうすい。自分の好きなことを、好きな時にしている、これから色々の体験を繰り返していくうちに、他との関係もわかってくるのだろう。今までは、かよわき息子に対して母親は全神経を彼に投じていた。少しでも快適なように。息子の方がこちらに合わせてくれないのだから当然のことなのである。まるで王子様と召し使いのごとく。しかしそうばかりはしてられない。少しずつこちらの意志も入れていこうとする時、彼の様子、状態を十分に知り(知ろうと努力し)その上で無理のない方法をとっていく。少しずつ少しずつそうしないと、みごとに失敗となる。幼児の場合と違い、その現象はすぐに現れる。幼稚園に於て、私の方からその幼児の中に飛び込み、じっくり理解してあげられたらどうか。幼稚園という集団としてのパターンがすべて出来上り、教師は何の不都合さも、疑問も感じない。

その中に無であった子どもが飛びこんでくる。とたんにドカッと教師の色ががぶざぶってくる。どんなに戸惑うことだろう。幼児が幼稚園に通うころになれば、幼児の方から他に合わせるようにしようとする力ができてくるのだろうか、一步教師が後へ引いて、子どもを受けとめてみる、そこから次の段階が生れてくるように思う。

幼児をしっかり受け止めてみるにより、大人である教師の趣味を押しつけることなく、ほんとうの子どもの姿が引き出せるのではないだろうか、私自身、最後まで新米の教師のはずであったが、最初に出合った時の畏れが、失われていたことに気づく。畏れを謙虚に受け止めることは、保育に大切な新鮮さとなるのである。純真に子どもとぶつかり合う姿は美しい。そして、子どもと気持が通じた時の喜びは大きい。教師が自分に合わせようとしていては、この喜びは生じないのではないだろうか。

「自分の子どもが生れたら、幼稚園にはやらずに近所の子ども達を集めて一日遊びましょうか」

そんな会話が我々夫婦の間で出たことがある。幼児期に、作られた集団ではなく、自然に集まった近い年代の子どもの遊びがほしかったからである。何かそこには真の付き合いがあり、それこそ、人間教育の場であると思うからである。そこには小さな社会がある。これはもちろん今でも望んでいることであるが、又別

の立場から幼稚園をみるようになつてきた。

親は忙しすぎる。もっと余裕を持って子どもに接したいと思う。だが四六時中一緒に生活の中で違った雰囲気、気分を持つという事は、むしろかしい。前項で、母親は常に子どもの側へおりて接すると書いたが、逆に常に一緒にいるが為に、ほんとうの子どもの気持、心を理解し得ない場合も往々にしてあるように思う。

昨晚こんなことがあった。夜、いつもの時間になつても寝つこうとしない。母親はあせり、あの手この手で寝かしつけようとする。が、かえってそれをいやがり逃げ出し、遊んでしまう。そこへ父親が登場する。何やら二人で遊んでいる。まだ言葉にならない言葉だが二人のやりとりはおもしろい。三十分もしただろうか、一人フトンの上に横になり寝入ってしまった。こんな時、私と息子とのやりとりを冷やかに見ていた父親に脱帽である。もちろんこんなに母親が子どもに夢になる時期が続くとは考えられないし、父親のように客観的に見、判断してくれる場として、幼稚園は必要なのだと思うことがある。又母親が子どもと離れる場になるということ、常にベッタリではなく、精神的にも、空間的にも、距離をおくことで重要なのであろう。その状態を自ら努力しなければならぬのであろうが、実際母親となつてみてこれが

意外にむずかしいことに気がついた。家庭に於ては、父親の役割は大である。同じ様な関係で、幼稚園が大切になってくる。母親から離れる場、監視されない場、一人立ちしていく一段階として、どんなに自由な場であろう。そしてそんな幼稚園がほしい。

### どんな子どもに育てよう

息子誕生の時、又時折りに息子の将来について話し合う機会を夫婦で持つ。今まで以上に、マスコミにより伝わる教育問題に敏感になる。新聞で学校教育についての問題が提議されると、今までは一般論として受けとめていたものが、もっと身近なものとして、本音で考えられるようになる。そして知らず知らずのうち、その中に引き込まれていく私を知る。何しろ、大学入試の共通一次試験と息子とがもう結びついてしまう始末なのだから、教育制度というものは、人間を教育していく手段であろう。現在の学校教育、特に入試制度は確かに問題があると思う。自分の子どもはそれ等に巻き込まれることなく、伸々とさせてあげたい、と思う反面、学校教育の中に入れば、否応なくぶつかることとなるであろう、母親としては、それから守ってあげたいと思う気持ちと、それにうち勝つ強い人間に育ってほしいという気持とになる。ひとしきり「塾」が話題にのぼったことがあったが、息子の

ことを考えると、まったく周囲を無視できるだろうか、それ程強い信念を維持できるだろうかと不安になる。現在もその様な気持ちで通わせている親がいるのではないか、以前は、その様な親の考えを客観的に否定できたのだが、今はその気持が分かるような気がするのである。いわゆる「お稽古ごと」もその中に含まれる。親が無能であることを横に置き、ひよっとすると、音楽の才能があるのではないか、ちょっと他の子どもより器用な気がする。又反対に自分はこれあまり得意でない。きつと小さい時からやればせめて人並になるのではないか。又、何の考えもなく、あの子がかしているからうちの子もという様な具合である。母親の子どもにかける期待は大きい。子どもとは、そんな期待と夢を持たせ、生かがいを作ってくれる物体でもあるのである。

しかし、その夢もちょっと置いておく。時折りの夫婦の会話もその修正の場になるのである。教育制度による学校、幼稚園は、器なのである。その中にどんな人間がいるかが大切なのだ、主体はあくまで人間なのだと思う。故に、もちろんしっかりした個々の人間を尊重した器を期待すると同時に、そういうものに左右されない、全人間的な教育を考えていくことにしよう。具体的には、まだわからない、否、もう無意識のうちに出発しているのかもしれない。抽象的な、当り前のことであるが、健康な精神と体

をつくるのが息子の目標である。そしてそれぞれ成長の過程に於て、息子自身が正しく判断してくれることを望むのである。

### 躾の時期

一日を少しでも上機嫌にすぐさせることに全精力をつぎ込んでいる——少々空廻りしている所もあることは認める——母親に、父親が口を出す。

——そんなに甘やかしていると、後が大変だゾ——と。

無事一日が過ぎてくれることで精一杯なのに何と無責任など、一瞬思うのであるが、フト、我に返ってみると、確かなのである。一日中息子と一緒にいるとその成長がわからない。いつまでも誕生時のあの姿なのである。従ってどうしても必要以上に手が出してしまう。

息子は二週間程前まで哺乳瓶を一人で持って飲めなかった。いつも母親が手をかしていたのである。それを見て父親が——もう一人で飲ませなさい——と言う。やはり上手にのめない。瓶を上に向けてことがわからない。又、手をかしてあげる。しかし二、三日もすると、もう一人前、サッサと自分から手を出し持つてのむようになった。全部のみ終ると自分でキャップをして、机の上におき、ニコッと笑うのである。夕食は、おばあちゃんと息子は

先にすませる。故に、我々が食事のとき彼は待っていないとはならない。始めは、かわいそうでならなかったが、今ではそれが習慣になり、大人の食事中は、静かに見ているか遊んでいる様になった。夕食時以外でも、大人の食事のじやまをすることはない。息子に限らないことだと思いが、これ等のことから、それを躾の方向へ持つていくことが可能なのではないだろうか。失敗してはやり直し、という繰り返しになると思うが……、かわいい子どもの動きを躾の穴からちょっと見てみると、又違った見方になるものである。

三歳あるいは四歳で入園してくる子どもは、それぞれに親から躾られてやってくる。それは個性と共に子どもを形作っているものだが、もう少し基本的な躾がなされていたらと思うこともしばしばあった。息子のこの段階で、もちろん偉そうなことは言えないのだが、幼稚園以前に躾は終っているのではないかと思う。現在の息子の行動半径は広くないし、動きも限られている、これから経験を深めることにより人間として生きていく大切な躾や、約束ごとを学び、又大人は教えていかなければならないであろう。今の私は息子の生き生きした姿をみて喜び楽しみ、かわいいかわいいで少々、おもちゃにしているきらいがあるかもしれない。母親として反省しよう。

## 個と集団

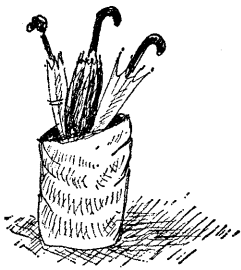
集団教育の開始時期だが、確かにある程度の年齢になると友達を欲するようになる。現在の息子でも「おともだち」「おにいちゃんおねえちゃん」は好きである。どんなに良い環境を設定してあげても一人では生きられないし、大勢の中の一人であることを知ることも大切であろう。息子ももっと強く友達を欲する時、集団は必要であろうが、ほんとうに今までの様な教育まで必要なのだろうか、私が心配するのは、それまでに個としての人格が確立しているかということである。集団には集団のルールがある。それを守ることは大切だ。そして、他との触れ合いの中から、一人では得られない人間として大切なものが生れよう。それと同時に、それ以上に、その子どもの持つ、その子どもにしかないものの、を大切にしたのである。

息子は今かぜをひいている。母乳をのんでいた九か月ごろまでは良かったが、その後どうもはつきりしない。丈夫な両親にとつて、こんな息子がはがゆくて仕方がない。しかし早く良くなるようにと、又少し良くなると、再びかぜをひかぬようにと、厚着をさせ、過保護になる。という訳で、ダメな母親は、今は只、早く息子のかぜが良くなることを願うのみ、実は、幼稚園はまだ遠く

の方にある。

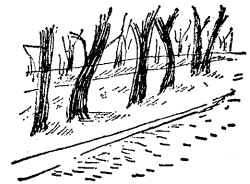
しかしこれを書いていくうちに、幼稚園を色々問題はあると思うが、大きくとらえようとしていることに気づいた。家庭と、幼稚園との役割りの違いがおのずからあり、母親の立場では解決されないことがある。それと同時に、幼稚園に対する期待も大きくなる。母親のできないことを全部可能にしてくれる所という錯覚におちいりやすい。幼稚園に入れることにより、親の役割を放棄し兼ねない。自由になった気持が子どもにもプラスになったらと思う。

息子は最初に、母親との出会いをした。家族、近所の人々、と出合いは増えた。次の大きな出合いは、幼稚園であろう。その大きな出合いが、息子にとって、又すべての子ども達にとってすばらしいものであることを期待したい。



# 保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——(二十三)



津 守 真

## 五 歳 児

ここに記してきた子どもたちが、幼稚園の最年長のクラスになった。その最初の週に、附属幼稚園にいったとき、入園したての三歳の子どもたちを見て、私は、この子どもたちが、すでに二年間をここで過ごし、成長しているのを目の前に見た。二年前に、三歳児のクラスに私がいったとき、傍を走ってゆく五歳児を、三

歳児とは異質な世界を形作っているかのよう、大きく感じた。しかし、いま、二年間を過ごし、あのときからそんなにひどく違っていかない、むしろ連続した世界がここにあるように思える。異質に見えた世界が、連続ととらえられるようになるということ、成長の体験に伴う、不思議な現象である。

これから、五歳児にふれた体験をもとにして考えてゆくことになるが、その最初の日に、私は三歳児と交わることになったので五歳児と三歳児とを対比して考えてみたい。

## 四月十九日

朝、庭を歩いてゆくと、五歳児の女児mがとびついてきた。何か面白いことをしゃべりながら、庭の真中まできて、私から離れ、走り去った。

そこに、Sら三人の男児が来て、私の肩や頭の上に乗ったが、(私は、瞬間に、三歳のときのことを思い出していた)、すぐにいつてしまった。

私は手持ちぶさたになり、砂場のはしに腰をおろす。男児I、K、Shが、山を作り、トンネルを掘って、何かいろいろやっている。砂場の端に、三歳の男児が、頼りなさそうにこちらを見ているので、私は「ライスカレー」と言つて、皿に砂を盛って出した。その子はすぐに受取る。このことから、その子との間に、皿のやりとりがはじまり、次第にその子は元気になってくる。

### 離れてゆくことと、寄って来ること

五歳児の女児mは、三歳の一学期には、私がゆくと、私の傍を

離れなかった子どもである。だれか他の子どもが寄ってくる、その子を押しつけて、私の手を引いて歩いた。当然のことであるけれども、いまは、私のところにとんできても、すぐに去ってゆく。自分が向ってゆく面白い世界が彼方にあるからである。

私の肩や頭の上に、三人の男児が乗ってきたとき、瞬間に、私は三歳のときと同じような場面を思い出していた。この同じ子どもたちが、室内で、私の上に乗って暴れ、私は放してもらえないで半日を過ごしたことが何度もあった。あまり暴れ方がひどいので、私は周囲を気にすることがしばしばあり、その子どもたちに見つかるのを恐れていた時期もあった。この日、頭や肩の上に乗ってきたのは久しぶりだったが、暴れるのかと思っていたら、すぐに、三人で一緒に走り去った。五歳児には、大人を介せず、自分たちで楽しむ世界がある。

私は手持ちぶさたになる。そんなことは、三歳児の中に入ったときには、あり得ないことであろう。三歳のときに、この子どもたちと遊んでおいてよかったと思う。

砂場の端に腰をおろして、五歳児の砂遊びを見ていると、三歳児のFが、頼りなさそうにこちらを見て立っているのに気が付く。砂場のへりから中に一步を踏み入れることができないでいるのが分るので、私はその子に皿を差し出す。以前にも記したよう

に、差出す行動は、心を差出す行為の行動的側面である。三歳児はすぐにその心を受け取ってくれる。何回も皿の受け渡しをする時、その子の心がこちらに寄りかかってくるのがわかる。そこには、三歳児の柔い感触がある。きょうは、この子と離れることはできないだろうと、私は、内心、覚悟している。

砂場の中では、Iが水をまきながら、「雨だ」という。また、「火山の爆発だ」と言っている。(私は、今年の今ごろのIを思い出していた。)山の頂上から水を流して、「ダムだ」と言う。「火山が爆発してダムになった」と言う。下の支えのところから、水が横に流れて、流れ出すと、「滝だ」と言う。私が大急ぎで補修しようとする時、「滝だからいいんだ」と言う。途中で三歳児がその山に手をふれると、「やめろよー」と言う。そばにいる子も、三歳児が、いじると、「おまえ、やめろよー」と言う。三歳児が皿を渡すと、じっと見ている、受けとる場面もある。

## 反復すること

砂場の中では、Iが、山の上から水をまいて、雨だと言い、また、火山の爆発だと言う。また、ダムだと言い、滝だと言う。水がはげしく流れると火山の爆発になるし、水が激しく落ちると、ダムになり、湧きたぎつ滝になる。Iの心の中の激しいエネルギーがここに噴出してみたいである。Iは、今年の四月に四歳から入園した子どもである。入園した当時のIのことについては、七十六巻十二号に記したように、Iは字を書いて得意になり、先生に承認を求めることが多かった子どもである。形にはまろうとする反面、三角形の形をかいていても、それが火山になって、爆発する図になったりする。

Iは、幼稚園で、自分からしようと思う遊びを大胆にすることができるようになればよいと思っていたが、一年以上たった現在では、ほとんどその目的を達したのではないかと思う。しかし、砂場で、水をまき、火山を爆発させる遊びは、四歳児の一年間を通して、たえず見られたIの遊びである。あるときには、とめないほど水を使って、こちらが不安になるくらいときもあったし、ある時期には、私がいくたびに、この遊びをしているのを見ることがあった。それは、Iが自分の心の中の形を破ってゆこう



とする努力の一過程だったと言つてよいのではないかと思う。今や、Iは、私の見るところでは、戸外でも室内でも、エネルギーにみちて、多様な遊びをする子どもである。このIが、こんなにしばしば、砂山の上に水を流して火山を爆発させる遊びを反復しているのは、どう考えたらよいのであろうか。

同じ類のことを反復するのは、そのことが、継続的に、その子にとって課題になっているからであると思う。Iにとっては、形を作ることと、形を破ることは、四歳のときも、継続した課題なのであろう。それは、あるときには激しく極端にあらわれ、あるときには、違った形で、穏やかにあらわれる。このような、個人の基本的な課題は、もしかしたら、将来も、いろいろの形をとつて、継続してゆくのかもしれない。また、Iが二、三歳だったときに、つき合うことができていたら、この同じことが、もっと素朴な形であらわれるのを見ることができたかもしれないと思う。

三歳と五歳とは、一見、違うように見え、五歳児はおとなびて、大きく見えても、子どもの中には継続している課題がある。

このことは三歳と五歳のみでなく中学生、高校生、あるいは、もっと後年になつても、言えるのではないかと思う。

しばらく、私が五歳児の砂場の相手をしている間に、三歳児Fは見えなくなったが、じきにもどつて来た。ビニールの袋に、花びらをいれていて、私に見せる。庭の地面に、赤くて大きな花びらが、一面に落ちてゐる。私も砂場を出て、花びらを拾う。

Fは、「おしっこ」という。私は急いでFの手をひき、途中から抱きかかえて、三歳児の部屋にゆき、廊下に出て、便所にゆく。

もどつてから、また、花びらを拾う。Fは私の手をひいて、花壇にゆき、チューリップの花の中に、ビニール袋の中の花びらを一枚とり出していれる。並んで咲いている赤いチューリップの花の中に、次々に、花びらを一枚ずついれる。Fは、チューリップの前にかがみこみ、花びらを一枚ずついれる。「チューリップさん」と呼びかけて、ニコと笑う。何回か同様のことをする。私は傍に一緒にしゃがんで見ていたが、暖い春の花壇の中で、心の和むひとときであった。Fは小さいチューリップを見て、「赤ちゃんのチューリップだ、目をつぶっていると大きくなる」といって、チューリップの前で目をつぶっている。

おしっこを訴えられると、他のことをおいても、大急ぎで、子どもを抱きかかえて連れてゆく。そして、もとのところに戻ってきたときには、その子どもから離れられなくなっている。こうして、三歳児のFとつきあうことになる。

## 拾う

子どもは、地面に落ちていた赤い花びらに目をとめ、かがんで指さきで拾いあげ、ビニールの袋にいれる。落ちていたものを拾いあげるのは、その人にとって、それが価値あるものだからである。おとなは見過ごしてしまうものに、子どもは目をとめ、かがんで拾いあげる。

## 花びら

赤い花びらが一面に散っているのを見ると、美しいと思う。その赤い花びらを、掌に拾い上げると、花びらの厚みやあたたかさを感じることができる。子どもが赤い花びらを手にのせるとき、子どもは赤い色の美しさだけではなく、赤い花びらの感触全体を、親しく感じとっているに違いないと思う。子どもは、生き物を掌にのせたと同じように、花びらを生きたものとして感じて

いるであろう。拾い上げた花びらは、子ども自身の一部となっている。花びらは、色と形の美しさの故に、おとなは図案模様を作りたい誘惑にかられる。しかし、子どもは、色や形の視覚面からだけこれを見ているのではなさそうである。触觉をもふくめて、その全存在を感じ、一枚の花びらをひとつの生きものとしてふれたいと理解してよいと思う。

## 花

Fは私の手をひいて花壇にゆき、チューリップの花の中に、花びらを一枚いれる。そして、「チューリップさん」と呼びかけて、ニコと笑う。チューリップの花も、友だちのように、生きた相手として、子どもは向い合っている。花びらは、チューリップさんへの子どものプレゼントである。花の前に、子どもと一緒にしゃがみこんで、花と向い合っていることが全世界である瞬間は、明るく、あたたかくて、静かである。こうして、親しく感じとる花の感触を、子どもはながく忘れることなく、心に留めているであろう。

三歳の子どものように、花と自分だけがすべてであるような世界をもつことができるとき、花は、生きた人間のように、語りかけ、また、語りかけられる存在となるのであろう。子どもにとつては、花は、そのように身近な友たちである。

柳田国男の「母の手毬歌」という文章の中に、「寺と椿の花」という一節がある。木綿の糸をまいて作った手まりをつきながら歌ったといわれる古い歌の一節である。

鎌くウらにまアゐるみイちで

つウばき一本見イつけた

其つウばきだアてのつウばき

御寺へもオててそオだてた

日が照エればすウずみどオころ

あアめが降られればやめどころ

鎌倉に参る道で、椿を一本見つけた。その椿は、伊達な（ぜいたくな）椿で、お寺へ持って行って育てた。日が照れば、涼みどころ、雨が降れば、休みどころ、という意味である。柳田国男の注釈によれば、ここでは、椿の花の美しいのを、いつのまにか人のように取扱っているという。お寺は、昔は、身分のある人の娘

や小さな子の、しばらく預けられている所であった。お寺の庭には珍らしい花や植木も多く、中でも、椿の花は、子どもにとっては、よい遊び相手だった。椿の花は、いかにも伊達で、豪華である。子どもたちは、いまでも、椿の花を拾って遊ぶのが好きである。椿の木の下は、子どもたちにとって、楽しい遊び場である。手まり歌が、椿の花のことを歌うのは、落着いた遊びの楽しい雰囲気の中で、両者が似通っているからであろう。

私が幼いころ、私の家に住んでいて、子どもの世話をよくしてくれた叔母があった。二年ほど前に、八十過ぎで亡くなったが、数年前から、きれいな糸で巻いた毬を作りはじめて、いくつかを私のところに持ってきてくれた。糸で巻いた手毬は、叔母にとつては、懐しさをこめたものであったのかもしれない。私は、まだ幼稚園にもゆかないころのことかと思うが、よく、針仕事をしているその叔母の傍に坐って、糸の切り端をもらったのを覚えている。赤や黄や黒の糸、中でも、絹糸の赤くて細いのがもらえる。とても嬉しい。その窓の外に、小さな庭があって、井戸があり、木があった。糸で巻いた手毬と、庭の木と、それだけの小さな生活範囲の中で、時間の制限もなしにふれた小さなものは、ひとつひとつが、忘れられない感触をもっていて、自分自身の内容を形成しているような気がする。三歳児が花の前にたたずんで、

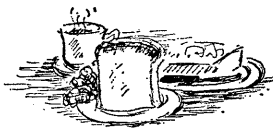
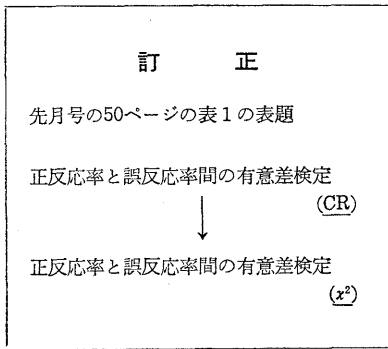
チューリップさんと呼びかけて、手にもった花びらをあげている姿にふれると、その小さな世界の中の感触を、子どもは、長い間、忘れないかと思うのである。

しかも、三歳児は、自分の世界の傍に、おとなをおいている。もっと大きくなったら、子どもは自分一人で同様のことをしているのかもしれないけれども、おとなにはそれはわからない。三歳児に手をひかれて、ついてゆき、ゆっくりとつきあうと、子どもの世界が私共に伝わってくる。その世界は、子どもにも、おとなにも、たいせつなものではないかと思う。五歳児になると、自分たちの世界を求めて走り去ってしまう。生活範囲が広がってゆくことは、成長に伴う自然のことであるけれども、それだけに、生活範囲がまだ小さい時期には、その世界でしか得られない感触を十分に味わっておくのがよいのだと思う。これが人間の底辺を作るのであると思う。

Fは、花壇から離れて、ジャングルジムにのぼる。じきに帰る時間になる。Fは呼ばれても、「カエラナイ」といって動かない。

私は肩車をして部屋にいった。部屋で、下におろすと、「カエラナイ」といって、すぐに、庭に走り出て、ジャングルジムにもどる。私はまた追いかけて迎えにゆく。こんどは、ひこうきで帰ろうといつて、ひこうきのように、両手で支えて、庭をひとめぐりしてから、部屋にもどる。五歳児には、もはや、こういうことはない。もっと物分りがよく、社会節度がある。三歳児もじきにこくなるのであるが、三歳のときには、三歳なりの生活が充実することがたいせつなのだと思う。それぞれの時期が充実しているときに、それは成長の途中の未熟な段階として意味をもつのでなく、その時期としての成熟があるのだと思う。

(つづく)



# 子どもの世界の中のモノ



実吉晴夫 訳

M・J・ランゲフェルト著 『子どもの人間学研究』より

(一九五六年マックス・ニーマイヤー書店刊テュービンゲン)

ランゲフェルト氏は、オランダのユトレヒト大学教授であり、また同大学付属教育学及人間学研究所の所長である。現象学の立場をとる教育学者であり、また、ヨーロッパの教育学の指導者として活躍しておられる。ここに掲げた論文は、一九五五年に書かれたもので、教育の分野で、行動主義の風潮の全盛の時期にこの論文が書かれたことになる。

ランゲフェルト教授は、数年前に、日本で国際新教育会議が開かれたときに来日せられ、この時の講演集が『教育と人間の省察』『統教育と人間の省察』として、玉川大学出版局より刊行されている。

この論文を本誌に掲載するにあたり、掲載許可をお願いし

たところ、早速、快諾と共に、次のような私信を頂いたのでご紹介したい。

「所謂西欧世界において、二千年余にわたり、強い力をもった考え方は、数学と物質科学に影響をうけた認知的、合理的、形式主義的思考である。それは、哲学、科学、人間諸科学神学等あらゆる面に強い影響力をもち、その結果それは産業や技術を作り出すのには役立ったが、真に『人間の生活』という名に価するような、人間らしい生活を作り出すことをしなくなってしまう。西欧の人間にとっては、このような文化をどう扱ってゆくかは、困難な、生涯をかけての課題である。」

(津守 真)

モノの存在ほど単純明快なものは何一つないように見える。子どもたちは、見たところただ、モノとは何であるかを「学ぶ」ことが必要な存在であるに過ぎない。それまでは未知であったものが、かれらに知られるようになる。しかし、この「未知のものは、あくまでもそれ自身の姿を変えることはない。一つの椅子は、はじめから一つの椅子であって、子どもが発達の歩みを進めて行くにつれて、それはおなじみの、よく知られるようになった椅子として登場するだけである。従って、子どもの世界の中のモノを尋ねる、というテーマは、大して期待するほどのものではないように思われる。その上、モノの世界とは言っても、結局のところ、そもそも日常の見なれたふつうの世界に過ぎないのである！ 何のために、この分り切った、何の問題もないような世界に問題を探さなければならないのだろうか。

しかし、人間の子どもは、決して、軟体動物が殻の中に包まれているように、肉体の中に包まれているのではない。人間というものには、まさに外交的存在そのものであって、肉体を具えて、世界の中に住んでいるのである。このようにして、人間はさらに、モノにかこまれて暮らしている存在でもある。しかし、この世界の中に生きていく、ということは、決してただ単純にモノをチェックする活動なのではない。「チェックする」ということは、言い

かえれば、「無関心である」ということを意味する。しかし、われわれ人間は決してそうではない。その反対である。子どももまた、決してモノをチェックする機械ではないのである。その上、子どもはモノも世界も知識として知るわけではない、しかしそのことは決して、全く縁もゆかりもない存在として対面する、という意味ではない。反対に、世界と世界のなかのモノとがわれわれを挑発するのである。

したがって私は、この論文の標題「子どもの世界の中のモノ」を改めて、「モノの世界の子ども」とすることなどは毛頭考えていないのである。子どもほど何の予感もなくこの世界の中へ入ってゆくものはない。まるでお伽の森の中へ入って行くように、子どもはこの世界の中へ、ありとあらゆる新しいもの、見知らぬもの、そして好意にあふれたものの魅力にひかれて入ってゆく。世界は好意にあふれ、無尽蔵の豊かさをそなえているように見えるのである。無意味ではないが、そうかと言って「知られても」いない。まだすべてのことが可能であって、それゆえまだ無意味ナンセンスというものも存在しないのである。

子どもが世界に対して、世界は意味のあるものだ、という前提に立つことは、人間は世界に意味を与えなければならない、という人間存在の根本的な事実<sup>1</sup>に由来している。動物の世界像は、か

これらの本能的な生活の繰返しの反映であつて、世界の持つ意味は明らかであつて、ただそれだけである。しかし人間は、またそれゆゑ当然人間の子どもは、そのような意味を見出すことはないか、あるとしてもせいぜい暫定的な形で見出すに過ぎない。子どもは先ず最初は、自分という有機体としての存在の課題に没頭するが、まもなく世界に関心を持つてとりくみ、世界を解釈しはじめる。

この解釈という仕事を遂行する場合、子どもは決して完全に自由ではない。ここではただ五つの重要な制限をあげることにする。

第一に、人間は肉体を持っており、これはスプリングボードであるとともに、また足かせでもある。肉体は疲労したり空腹を感じたりするし、ある特定の場所に位置を占める、という制限がある。

第二に、子どもは独力では生きられないし、助けが必要であり、自分の力には限りがあるということ勘定に入れておかなければならず、そこで第三の制限として、他の人間が存在しており、これがたしかに食事の世話をしたりモノを教えてくれたりするが、ともかく何事につけても彼らの存在を計算に入れておかなければならない、ということがある。

第四に、われわれの生きている世界は、その様々な屬性という形態でわれわれの役に立ったり、あるいはわれわれのすることにストップをかけたたりする、ということがある。そして最後に、人間は、第五の制限として、じきに過去を持つ存在になつて、これが人間を支える柱になると同時に、生活と発達の可能性を制限するブレーキともなるのである。

子どもというもの、つまりこの特定の子どもは、さまざまの仕方、束縛されてはいないまでも、自分自身と世界との双方を形成してゆく過程において、われわれが後で、自分の世界を具えた人間“つまり個人と名付けるものに成つてゆく可能性を制限されている。つまり、意味を与えるという過程プロセスがどうしても必要になつてくるのである。私は自分自身と、自分がある中に存在している世界とに意味を与える。しかしながら、意味を与える仕方にはさまざまの種類があつて、ここではごく簡単に例を示すとどめたい。

第一にあげるのは、“公の意味賦与 (offene Singebung)” と名付けたと思う仕方である。これは、われわれが他の人たちの公の共同生活、公の共同作業によつて組立てる解釈である。これは、同意に基づいて成立し、また存立する意味の与え方である。これは、われわれが覚めた意識の下に共有する世界である。

その次には、この公の意味を乗り越えて与えられる「自由な意味賦与 (unverbindliche Sinngebung)」がある。これはただ世界に對してだけ自由なのであって、決してバラバラな無構成なものではない。私が言おうとしているのは遊戯の世界像である。周知のように、この場合モノはなんら固定した意味を持っていない。たとえば、公の意味ではナイフと呼ばれるものが、ある時は橋であったり、柵であったり、兵士であったり、家であったりする。しかし、それにもかかわらず、ひとが遊ぶことが出来るのは、ただ遊び仲間の与える意味を共有する時だけである。

従って、この意味の与え方は、ただ外に向ってだけ自由なのである。つまり公の意味賦与によつては拘束されないが、それ自体の論理に従つて考えればやはり拘束されているのである。

ある子どもがエンピツで「ブリッジ」をして遊ぶ場合、この子と一緒に遊ぶことが出来るのは、この意味の与え方に同意する者だけである。しかしまた、遊びが遊びであるのは、公の意味賦与に至る道が開かれている限りにおいてである。もしもエンピツがもはやエンピツになることが出来ないならば、われわれは狂気の世界に入り込んでしまうのであり、この狂気もまた一つの意味賦与ではあるが、閉鎖されたものになってしまう。

第三に——芸術家の「創造的な意味賦与」がある。これは、そ

れ自体として一貫した固有の世界を案出する。私はここではこの世界は無視して先へ進むことにする。

さらにまた——そう名付けてよければ「個人的な意味賦与 (persönliche Sinngebung)」ともいふべきものがある。これは、私が自分自身を個人として構成するやり方である。というのは、私は私個人として、世界を、二元的な統一体としての私と世界が私にとって有している意味に従つて形成するからである。この意味の与え方は、明らかに、さまざまの企図 (Projektien) の問題性を追究する場合に、とくべつの意義を獲得する。

さて、子どもの自由に対する独自の制限、たとえば肉体、依存性、他の人間、「客観的な」モノの世界、生活史、またそれに關連して、意味の与え方の諸形態を、ただちょっと見わたしたただけで、人間の世界を解釈する作業がいかに複雑極まりないものであるかが歴然とするのである。人々の存在が無意味に思われても、それだからと言ってわれわれはまだ殆んど勇気をそがれはしないし、人生の絵図が混乱を極めていることは、言うなれば世界の正常な光景であり、むりにこじつけた世界観による斉一性よりもむしろ正常な姿なのである。私が思うに、われわれは再び、この世界を一望の下に見渡すことなどは全くあきらめてしまっているよ



うに見える多くの人々に対して、忍耐をやしなうことが出来るのではなかるうか。それはなにも、意味を賦与するいろいろな方向の中に、またしても自我の対象に対する関係の可能性が一つならず存在し、従ってまたもや様々に方向づけられた対象の領域が成立する、という理由だけではない。

このことをわれわれは、ごく日常的な例を手がかりにして、仮の現象学的な実験にさらして見たいと思う。たとえばスリッパを例にとってみよう。なんといろいろなものになり得ることか。一つのスリッパはスリッパであるほかに、毛の生えたあるモノでもあるし、その上にあごをのせてペロペロなめる道具でもある。最初の場合は単に使用する対象であるに過ぎないが、第二の場合は純粹な向自の感覚対象である。子どもはスリッパを、くぎを打つために使うこともある。この場合スリッパは使用対象としてのそれ自身ではなくて、使用された対象である。ある種のモノの属性——この場合はかたいかかと——が選ばれて、使用価値が再認識され、使用目的に従って利用されたのである。従ってそれは、使用された対象であっても、決して使用対象、その属性の全体がある特定の使用方法、この場合はスリッパとしての使用方法に従って整えられた使用対象ではないのである。しかし子どもはまた、そのモノにふさわしい利用法とはちがう応用の途をスリッパに見出す

ことがある。たとえばスリッパを人形のゆりかごととして使うことなどである。この場合には、ゆりかごととして生れ変ったスリッパは、あくまで遊びの世界の設計図の中にとどまっただけで、決して——ハンマーとして利用されたスリッパのように——公に認められた世界計画にとり入れられて道具としての機能を忠実に果すわけではない。

さらにまたスリッパは、現実の人生が演じられる舞台の背景に退いて姿を消してしまうこともある。スリッパがある場所に「置いてある」という場合、それはただ「そこにある」というだけであって、ほとんどこの世の外にあるも同然であり、この特定の子ども達の生活にとってなら現実の意味を持たない存在になってしまう。スリッパはまた、たとえ遠くはなれた所にあっても、もしもそれが絵画の対象として提示され、観察され、あるいは描写される場合には、くつきりと前景に浮び上って来る。またこのスリッパが、そういうものとしてかくかくの仕方では製造されるものだということを知れば、子どもの生活に密接な関係を持つモノになる。

次にスリッパが小さな子どもの愛の対象、たとえば死んだ弟の思い出の印となる場合がある。あるいは——この場合スリッパはわれわれにとってまたしても別の関連の中で登場する対象となる

——このスリッパが父親のものであるとすれば、子どもはその所属関係をすぐに見分ける。このスリッパは「父親の印」であって、子どもはスリッパを目にするなり、決して「スリッパ」とは言わずに「お父ちゃん、お父ちゃん」と言うだろう、まるでスリッパが父親の身体の一部 (Parspro toto) であるかのよう。一つのスリッパはなんといろいろなものに変身することだろう！

この上までもっといろいろなものになる例をあげて行くことが出来るだろう。……

対象のモノとしてのあり方の様態をもう一つだけ挙げてみたい、それはいわゆる「贈り物」である。われわれが結婚式のお祝いに、花を生けた花びんかあるいはただ花びんだけを習慣に従って贈り、若いカップルが、将来生まれて来る初めての子供がこの品物をテーブルから下へひきずり下ろしてしまふ瞬間を今から楽しみにしている、という場合、われわれは贈り物をしたとは殆んど言うことが出来ない。私はそのようなものを「まいない (cadeau) と名付ける、というのはい——フランスのことわざにあるように——「小さなまいないが友情を支える」 (Les petits cadeaux aux soutient l'amitie) からである。そして、後に明らかになるとおり、贈り物の場合は事態は逆で、まいないが友情を支えるとするなら、その反対に愛と友情とが贈り物を作り出すのであつ

て、これはどんなに小さなものであつてもいいのである。<sup>(註1)</sup>

四歳の子どもが、新しく生れた赤ん坊に乳を舐ませている母親のところへ来て、手に宝物を持っている。みるとちっぽけな雀の羽根で、「これ、新しい弟にあげるよ、まだ小っちゃいから」、と言う。

これこそが本當の贈り物であつて、「小さなまいないが友情を支える」のではなくて、われわれがここで出会うものは「小さなまいないを支える愛情」 (l'amour qui soutient les petits cadeaux) なのである。この小さな羽根は愛情に満ちた結びつきの印であつて、羽根が小さい、ということはい——弟もや、つばり、小さい、ということをあらわすものでもある。しかし、この小さな羽根はなんとやさしく柔らかない羽根だろう——こういう時、ひとは自分自身が完全で柔和な存在と化する。何かを心をこめて贈り——「まいない」をするだけではない人は、自分自身を贈るのであつて、彼自身がモノになつているのである。また、ある人が恋人に銀をプレゼントする場合、つまり本當に心をこめてプレゼントする場合には、かれ自身がピカピカに光り、鏡のように曇りのない存在となつているのであつて、愛する人はかれにとって全く明るく澄み切つた鏡のような存在なのである。かれが彼女に水晶をプレゼントするならば、その時かれはかの女に、その眼の澄み切つた美しさ

と二人の愛情の純粹さとをプレゼントしているのである。

(註1 このフランス語はここではただ術語上の区別をするために使われている)

贈り物をする時、贈り主は自分自身を贈るのであって、どんな場合にせよ、自分自身の全体の一部をプレゼントする。まいたいの場合には、店にある品物を贈るのであって、多くの場合、店の売り子のすすめに従って贈るに過ぎない。

鳥の羽根を贈り物にする小さな子どもは、もしもこんなに値打のない品物を「まいたい」として贈るのだとしたら、かれは小さな我利我利者になってしまふことだろう。

しかしかれは、ほんとうに心から贈り物をしているのだから、その場合のかれは豊かな心を持った気まえのいい人間の子どものなのであり、その羽根はけっして見ばえのしない、意味も価値もない物体ではなくなっている。その贈り物は、贈る子ども心の現実のなかに最も深く根をはり、子どもは、かれの主観的志向性、つまり、「この小さな羽根を、ほくは羽根みたいに小さな弟にプレゼントするのだ」、という真剣な意志によって全身を貫かれているのである。モノ、つまりこの角のような、毛のはえた、役に立たないモノは、完全に背景に退いてしまふ。もともと対象そのものは、ただ贈り主の愛情を見直すことの中にしか存在しない。

そうなるこの羽根はもはやほとんど羽根ではなくて、われわれが「感情」をかけるクギのようなものになってしまふ。——そしてもう一歩進めれば、心理学者たちはきつこう言うだろう、この場合大事なのは投影 (Projection) である！ なぜなら「対象はたんに主観的な感情の担い手に過ぎないからである」と。投影であらうとなかろうと、現象として明らかなのは、この小さな羽根は、やさしい思いやりというおあつらえむきの地面の上へ落ちたのであり、その場合いちどにはつきりするのは、この愛情の表現であって、もはやかれの愚かな主観ではない。

われわれはみんな、子どもたちにとつてもとくに重要な、モノの独特な訴えかけ (Appeal) というものを知っている。モノの有する何らかの特性がわれわれに対して訴えかけ、対象がわれわれにいわば動詞的、形容詞 (Gerundivum) で話しかけるのであり、対象がわれわれに対して、われわれがそれを使って何かをするように要求することである。それはすべて羽根の例でもあったことであるが、われわれはこの訴えかけというものを、シュトラウスの言う世界に対するパトス的な (pathisch) 関係という概念によつても知っている。たとえば、丸いものは転がることを、細いものはのびたり曲がったり、ムチになったりすることを人間に要求する、ということである。——わたしはしかし、今度はモノの挑発

的性格というものの他の側面に注意を向けて、その例として箱をえらんでみたいと思う。

さてここで、ちょっと、ある子どもに箱を一つプレゼントすることを想像してみたい。われわれが彼に贈ったものは、決して上手に折りたたんだ一つのボール紙ではない。実際問題としては、われわれは彼にプレゼントを通して一つの要求をつきつけたのであって、それは、中に何か入れてみないか？ ということに等しい。空っぽな箱がじっと見つめている。そのままですむわけがない。

子どもはこの「声なき声」をとてもよく聞きとって、あたりを見まわし、二、三分の後にはもう何か入れるものを見つけるか、それとも小さな物乞いがそばにやってくるということが起る。

「でも……ここへ何を入れたらいいの？」と子供は言う。そのとき子供にキャンディーを一個でもやるのが出来たら申し分ない。もしもこの一個のキャンディーがその箱の空間を少しでも満たすことが出来れば、空っぽの箱はたちまち空虚なものからすばらしく美しいものに生れ変わるのである。動詞的形容詞の要求に対しては、一個のキャンディーを空間にゆだねる、というこの犠牲だけで十分なのである……それがそのまま一個ですむかぎり。というの、このキャンディーはすぐにまた、だまってわれわれに對

する要求を続けるからである。どうおねだりしたらうまく行くだろうか？

この箱がたちまち忘れられてしまうこともあるだろう。空っぽのまま放っておかれる場合もよくあるし、また、のりでべとべとになった塊が、子どもは事実この箱をそれ自体として、解釈し利用したのだということを示している場合もある。この場合には、子どもは事物の訴えかけに屈したのである。

これまでに述べたところを要約してみよう。

人間は一つの世界を持ち、この世界と共存しながらかれ自身の課題を持つ。

かれの課題とは、解釈の作業であり意味を与える作業である。

その場合人間は決して無制限に自由ではなく、私は五つの自由に対する制限を挙げておいた。

この自由に対する制約、この避けようのない所与の条件のうち数えられるのは、肉体——これはモノではない——とそれからいわゆるモノである。これらのモノ、すなわち対象は、その対象としての属性や標識においては動かしがたいものであるかも知れないが、この同一の事物を材料として、また非常にさまざまな意味の連関が表現する可能性があり、それはスリッパや箱の例によ

って示されている通りである。

箱の場合には、モノの独特なあり方の可能性が登場した。現実には存在しない何かが存在したのであるが、それはつまり空間 (Uoere) である。そしてもしも、最後に残った小さなキャンディーがとり上げられてしまったならば、全く大きな箱の空間が成立するが——、この空間は、このたった一個のキャンディーがまたもとへ戻されれば消失するのである。この場合に問題になっているのはモノの世界一般の可能性——空間の可能性——であり、この空間はこのモノの中からわれわれに対して姿を現わすが、決してこのモノの属性ではないのである。贈り物の場合には、モノといるものがいかに深く人間の自我の世界の中にとり入れられ得るものであるか、ということが分った。箱の例から学んだことは、モノは、それ自身の属性というものを離れて、世界そのものの中へ深く滲透してゆくものだ、ということである。

さてここで、われわれの知る限りでは、子どもははじめて世界の舞台に立ったのであるが、子どもはまだモノを知らない。モノは、すべて述べたように、おなじみではあるが知られてはいない。子どもはどうやってモノを知るのであろうか？

疑いもなく児童心理学はすでにこの領域ではわれわれにさまざまなことを教えており、その概括を与えるなどというのは余計なことである。けれどもわたしは、全く別の側面から、子どもとモノの世界との出会いというものに対して一つの光を投げかけてみようと思う。

いかにしてモノと自我とが世界の中へ足を踏み入れるか、ということはわれわれの見て来た所である。今度はもう一つ、これまでまだ分析していない他人に対する関係というものを選んでみよう。思い出してほしいのは、子どもの人格形成作業を進める上の第二の自由制限は、自分が大人に依存しているということであり、それと密接に結びついた第三の制限は、他の人間が存在することだ、ということである。今度は、子どもは、世界を知覚し世界を認識する上で重要な部分を他人に負うている。子どもは、無限に多くのモノを、他の人間と共存するというシチュエーションの下でのみ知ることが出来るのである。

世の中には、だれかといっしょに出会うように出来たモノさえあり、たとえばシーソーがそうである。シーソーの上に一人、すわるというのは、比喻としてしかあり得ないので、ふつうは誰でも二人で乗るにちがいない。この対象は、すでにその形からしてこのことをはっきり示してもいる。つまり、二つの座席が作られ

ていて、一つは左に一つは右にあって真中に支柱があるのである。シーソーが上下にゆれるのは、いっしょにシーソー遊びを営む二人の遊技者がそこにいる場合だけである。

人間の共同社会ゲマインシャフトというものは、ここでは全く明らかに、二人の遊技者の共有性としてその対象の方から規定されている。遊技者の二人は、対象によって、お互いの役割を与えられている。わたしは、この形態の共同社会を、「共有性 (Gemeinsamkeit)」と名づける。これに対して、このようにモノによって条件づけられていない共同社会があり、これをわれわれは「共同社会」そのものと名づけたい。われわれの念頭にあるのは挨拶であり、たがいに顔を見合わせる二人の人間の眼差しであり、その他あらゆる形態の人間同士の共存であって、この場合モノが登場することも勿論しばしばあるが、しかし決してこの共存を構成 (Konstituieren) しないのである。

シーソーは完全な共存を創り出す、もしも誰もバートナーがいなければ、シーソーは一個の失われた機会であり、明示された非可能性である。注意すべきことは、対象が第二の男を請求している、ということである。対象はこのことを完全に具体的に示している。ところが、世の中にはまたさまざまなモノがあって、他人の存在を指し示しはするが、その指し示す性格が具体的に読み取

れるようなものではなく、また経験出来るようなものではない、というようなモノも存在している。

これを非常にはっきりとあらわしているのはボールである。回転する球体として、ボールはパスト的に行動を挑発する直接的な言語を話す。回転するボールは人に蹴られることを求める。ところが、われわれがボールをずっと遠くの方まで蹴ったとすると——次のことが起る、すなわち、一人の他人が現われて、それをわれわれの方へ転がし返すのである。これが一つのあり得べき相関関係、一つのあり得べき相互関係を発見することにつながることは確かであるが、しかしこのことは、シーソーの場合のように、ボールそのものうちにはっきりと読み取れる形で存在してはいないのである。ボールは、はね返ったり、はずんだり、転がったりすることによってわれわれの遊び相手になるが、——それがわれわれを遠く離れたところに行つた場合には、しばしば共存する他人をわれわれの所へ、われわれの世界の中へ導き入れる働きをする。

けれども、この共存する人間が決して自分から進んではわれわれの世界の中に姿を現わさない場合がしばしばある。そういう時われわれは他の共存する人間、われわれの教育者を、その対象に即して比較的縁のうすい共存者とともにわれわれの世界の中へ編

入させるために必要とする。

たとえば、子どもが道路の汚れをまだ靴につけたまま椅子の上へよじのぼったり、あるいは、乗物の中の客席に上がったたりする時、われわれ大人はかれにこう呼びかける。「おい、気をつけろ、君は座席を汚している。すぐにどこかの小父さんが来てそこに腰かけるんだから」さもなければそのモノは、時間の中の無人の島に生きていることになるが、この場合モノはその無人島からはる運ばれて来て、われわれの時間計画の中へ編入されるのである。すぐに、あるいはある時間が経ってから、他の人々が来るのである。

またわれわれは、何千回も子どもにむかってこう叫ぶ。「気をつけろ、それをこわしちゃいけないよ」先ず、「こわす」というのは何を意味するのだろうか？ もしも神さまが、死んだお祖母さんを天国でまた若くて元気に暮らせるようにしてくれるものなら、だれかがお父さんの万年筆をハンマーのかわりに利用したとしても、そんなに大騒ぎをする必要はない。けれどもモノはあくまでもその本来の姿で存在すべきなのである。それゆえ、それが完全なままでいること、それが昔わが家においてわれわれに所属していたとおりの姿で存在していることが重要なのである。

なぜならそれは、われわれの最も身近な世界の既知の一部を成

しているからである。それは、われわれの慣れ親しんでいる世界を構成する要素 (Konstituens) としてあくまで完全であるべきなのである。このように、お母さんのお皿や茶わんもまた、あくまで完全でなければならない。ところがよく考えて見れば——それは文化の一覽表にはかならない。茶わんやお皿が完全な姿を保つことによって、それは独自の対象としての永遠性を維持するのであり、こうしてさらに次の年には、いまインドからはじめてこの国へやって来た新しい伯父さんが、伝説上の人物になっている母方のひいおじいさんが持っていた茶わんで飲み物を飲むことができるかも知れない。

このようにして、モノとの出会いということは、歴史と未来の世界へ足を踏み入れる、という意味を持つ。子どもの世界の中のモノは、それ自身固有の年齢を示しているのではなくて、おのずから、もういない人間やまだいない人間の生活と世界とを指し示しているのである。勿論、家具や什器に対する俗物的な失うことを恐れる不安もある。しかしまた、モノに対してその価値にふさわしいコトバをかけるように、という要求もあるのであって、これは社会教育に対するよい貢献を意味するのである。

他人、というものは、モノを知るためには非常に重要な存在であって、しかもそれは、対象がわれわれを相手のところへ向かわせ

る時ばかりでなく、対象はしばしば大人たちによって監視され解  
釈されて、その結果子どもは否応なしにやはり、モノを通じて人間  
生活の新しい意味の次元を再認識せざるを得ないからでもある。

(例えば共同使用者、昔の時代、昔からわれわれに所属している  
もの、当時のものと現在のものとの連続性)

モノの背後には又しても人間が控えていて、かれはモノを通し  
てこちらを眺めている。このことがとくに明瞭になるのは用具に  
おいてである。用具というのは両棲類であり、二種類の主人に兼  
ねて仕える使用人であって、事物の世界と人間の愛情との双方に  
適合させられている。

ひとがかの両棲類を利用することが出来るのは、ただ、純粹に  
有機的な取扱い方や解決法から一步を踏み出して、その機械的な  
取扱い方や解決についてすでに何か本質的なことを理解している  
場合だけである。というのはつまり、石から、どうやってモノを  
斬ることが出来るか、ということをたくみに聞き出して知っている  
場合だけである。

さてそれなら、自然物の場合はどうだろうか？ われわれは  
今、石について述べた。自然物に遭遇するのは、「われわれの家」  
とは別の種類の自由が存在する一つの世界においてである。わた  
しはここでは動物は除外して話を進めるが、動物というものは全

く特別な関心を惹くものであって、それはかれらが何かを「行  
う」からである。かれらは飛んだり走ったりして私の世界の中を  
出入し、何かある珍しい音声を発したり、あるいは私の顔をなめ  
ることさえある。

植物となると、もうすでに一つの独特な位置を占めている。そ  
れはとくに花によって明らかに示される。しかし、いともたやす  
くひとは草や花を、あたかもそれが庭園の小径の上に敷かれた砂  
利であるかのように、踏み越えて散歩を続ける。「花を摘む」こ  
れはにわとりと同じように庭から餌をついばむことであって――  
その娛しさというのは、己が何かじぶんのものとして「振り入れ  
る」ものを持ち、しかもそれが美しい色をしている、ということ  
から来るのである。しかし、なんとたやすく、ひとは花束を忘れ  
てしまい、忘れられた花が道路の上に放りっぱなしになっている  
ことがなんと多いことだろう！

それでもなお、自然の世界は自由の王国であって、自然をいた  
わることを教えられた子どもは、自然をゴミの山をわきにしては  
しゃぎまわる場所だと心得ている大都會の住人よりも、はるかに  
よくこのことを理解している。つまり、自然は宿題から解放され  
た場所なのである。モノの訴えかけ (Appel) とは、われわれの  
自由に参加する自由への呼びかけである。自然の美しさというの



は、人類が後代になつてから発見したものであつて、危険と愛らしい魅力とはその反対に古くから知られている。しかし子どもが先ず第一に自然を知るのは、自由の領域としてである。木によじ登るのは、木が招くからであり、石や岩にのぼるのもそうである。砂の中や雪の中や水の中で遊び、石で家を建てるのも——常に、流れる水や渦を巻く砂や、あるいは美しい形にまとまつた雪がそうするようにさし招くからであつて——これらのモノは全くパトス的な方言を語つて遊びを誘発するのである。

しかしすぐにまた、この形のない材料を使った不特定の操作は終りをつけて、形態化 (Gestaltung) がはじまる。砂か雪を使って何かを築こうとしたり、あるいは小川の中に橋を一本架けたいと思う人は、砂や雪や水の対象としての特性を計算に入れなければならぬ。又しても、モノの世界が、形を築いて行く人間、すなわち意味を与えて行く人間をおのれ自身の内へと、まるで魔法の森の中へ誘い込んで行くように、誘い込むのである。形態化と意味賦与という深い人間的な作業に没頭している人間は、従つて決してより深く己の「自己性 (Eigenheit)」「のうちへ沈潜してしまふのではなくて、かれはますます広く事物の世界の中へと歩を進めているのである。この世界では、ただ事物自身の声だけがかれにストップをかけることが出来る。ペーコンの言葉を借りるな

らば、「ここでは人は、ただ事物に確実に身を委ねることによつてのみ支配することが出来る」

しかし、「事物に身を委ねる」とはどういうことであろうか？ これは自由の喪失を、奴隷化を意味するのだらうか？ とんでもない！ これは勝利を意味するのである。なぜなら、勢よく流れる小川の中でたつた三つの石でも動かないように組立てる方法を理解した人は、世界を変えた、と言つてもよいからである。

己の品格の高みから砂の城や雪だるまや橋をつまらぬ「子ども遊び」として、せせら笑つて見下ろして片つけてしまふ大人は、何とまちがっていることだらう！ それらのものこそ、形も意味もないものに形と意味とを与えたという点において、まさに人間の真正で本質的な功績なのである。それらは、客観的な対象の特性の王国へ足を一步踏み入れたことを意味する。それらは、手を水の中へ入れておくとか、砂を手の上からこぼす、とかいうような、事物があるがままにしておく原始的な自由を断念したことを意味する。従つてそれは一つの成長であつて、成長というものはつねに、原始的な自由と安全の放棄を意味するのである。まさに安全の放棄である！

なぜなら、見慣れた世界を立去る人は、何かを賭けているからである。かれは、自分の試みが挫折するという危険を賭けてい

る。かれは失敗の危険を覚悟している。従つて、精神的成長というものは、安全の放棄ということを前提としているのである。このことはまた、原初の基本的な安全と、将来にわたつても付随して来る安全とを前提としている。この最後の、われわれ人間につきも随き従つていなければならない安全は、最初の——両親や教育者によつて保証された——安全が背景に退くやいなや、われわれ自身がその責任を引きうけ、保証しなければならない安全として前景に現れるのである。

教育学において、われわれは、指導と早期に己自身の責任を自覚させることとの間にある問題をめぐつて行われた古い論争を知っている。私は、今はこの周知の問題には立入りたくないが、その一つの側面を、いわゆる「教材」(das didaktische Material)を例にとつて論究することは許されるだろう。とくにモンテッソーリシステム(Montessori-System)をめぐる討論においてはたびたび、マリア・モンテッソーリの教材が、子どもは指導してやれば十分なのに、子どもに強制するきつかけを与えることがよくあるのではないか、という疑問が討論のテーマになっている。私はただフリードリヒ・フレーベルとマリア・モンテッソーリの教育実践上の見解と方法とが対照的に述べられているヒルデ・ヘッカーとマルタ・ムーチョフの名著に対して読者の注意を喚起するに留めたい。<sup>1)</sup>

1) H・ヘッカー及M・ムーチョフ著『FR・フレーベルとモンテッソーリ』ライプチヒ一九三一年

ヒルデ・ヘッカーはこの書において(三三ページ以降)、ある小さな男の子が、円柱状の棒の入った積み木の箱をあけて、円柱をすべてわきへのけると、一番太いのを二本箱の下へ入れて車輪にして、大喜びで、車だ、と言つてテーブルの上で前後に転がしてゐるのを眺めた、と言つてゐる。ところがこれを先生が禁止してしまった。もう一人の男の子は、階段しか組立ててはならない積み木を使つて、立体的な馬を組立てた。

ところが先生はかれに向つて、「階段」を組立てるように要求した。かれはそうしたが、しばらくするとまた馬を組立ててしまった。こうすることが三回続いたので、かれはどうとう積み木をひき出しにしまえ、と言われてしまったのである。マルタ・ムーチョフも似たような男の子の話をしているが、かれは、すでに何度も何度も箱に入つている円柱をとり出して、それをでたらめに机の上に並べ、それをまた箱のさし入れ口へ戻すことをくり返してゐた。

ところが突然かれは、その円柱をとり出してすぐに箱についてゐるそれぞれの孔の横へおいて机の上へ並べれば、たいへんな勞

力の節約になることを発見したのである。事実それは貴重な発見であった。ところが通りかかった女の先生は——マルタ・ムーチョフの書いているところによれば——「かれの忘れていた円柱の掻き混ぜ作業を黙って大意ぎで手伝ってやることによって、男の子が定められた通りの感覚の訓練を実行し、本来の課題を思い出すようにさせてやることをかの女の義務と見做したのである」<sup>2)</sup>

## 2) 原著一二三ページ

マルタ・ムーチョフはここで「功績の抑圧 (Unterdrückung)」<sup>1)</sup> という言葉を使っている。周知のように、システム化の過剰、教育のおしつけ、誤って自然な発達と教育のプロセスと見做されたあまりにも不自然なきめつけ方をめぐって、論争の嵐がまきおこっている。われわれはこの論争それ自体には深入りしようと思わない。しかし、最も重要な意見の相違の一つが、子どものモノの世界が何を意味するか、乃至は子どもの発達上のある種の進歩が行われた後何を意味し得るか、ということに関する理論と密接に結びついていることを知ることは重要である。

正統派のモンテッソーリ学説においては、先ず第一に、共有性の上に築かれた対象の領域——シーソーのような型——というものが背景に退いてしまう。ところがそうになると、対象との交わり

は独白を通じたものと考えられてしまい、対象はすべてたった一つの意味しか持たないものと見做されて、庭の片隅に自由な可能性を求めて視線を投げることは、単純に誤りとして片づけられるのである。

対象に関するこの見解の底にあるのは、古典的にはライブニッツによって定式化された自然科学的連続性の理論である。<sup>3)</sup>

3) 「従って人間は動物とつながり、動物は植物と、植物は化石とつながっている。そしてさらにこれらの化石は、われわれの五感及想像力が完全に死んでおり形を持たないものだ、と表象する、かの物体に結びついているのである」(ヴァリニョン宛書簡 哲学的著作集ブーヘナウ/カッシーラー編第二巻 一九二四年ライブツィヒ刊、七五ページ以下)

この世のあらゆる現象の中には、ただ、一つの法則が支配して居り、精神の発達もまた、系統発生的に見てもあるいは個体発生的に見ても、この基本的な遺伝的素質に従って行われる、というのである。子どもの発達しつつある精神は、教育を受ける際の学習の対象に関して、この発達自体が従うのと全く同じ法則に従うような特性以外の何物も発見することは出来ない、とされる。そして子どもの精神そのものは、単に暫定的なもの、いわば通過段階

と評価すべきものであり、そこを通過して精神は、自然科学者たちの自然というすべてを統一する真理へと発展して行かなければならない、という。

このような世界像の中では、事実発見の自由などというものは時間の損失の危険をはらんだ余計なことであって、こうなると、モンテッソーリとともにわれわれは、純粹な權威主義的教育になり近づいてしまうことになる。ここで支配している自由とは、非常に入念にコントロールされているが、それにもかかわらず、**「自然」**だと銘打たれた発達を完成する自由である。

この場合は、一つの自然主義的な世界観によって、発達全体が一つの意味しかないものとしてとらえられている。このたった一つの意味を持った発達のほかには、ただもう無意味なものが支配するだけである。

けれどもこの場合には、四つのそれぞれに異なった発達の概念がでたらめに混じり合わされている。このような混合の中から、われわれはありとあらゆる注目すべきものを取り出して来て説明することが出来る。

まず、第一に存在するのは、生物学的な発達概念であり、これは一つの生物機械的 (biomechanisch) な強制力 (Gewalt) と必然性によって己を貫く力 (Kraft) から出発する。必然的にたどる個

々の時期を伴った発達の経過は、その発達の目標とともに正確に知られている。主人は本質的に受動的である。毛虫と蝶の発達を考えて見ればよい。

第二に存在するのは活動発生説 (Aktuelgenese) であって、これは、ある特定の新しい活動形式を獲得することによって、ある生物の発達が進む、という説である。こうして例えば、子どもは歩行や水泳や粘土細工を学ぶのである。主人公は習得すべき活動形式によってその活動を完全に規定される。

第三の存在は、ある与えられた精神的形式の基質 (Substrat) にもとづいて遂行される発達である。この場合、エルンスト・カッシーラーならば、**「象徴的形式 (Symbolische Form) と**いう言葉を使うであろう。こうして子どもは、ある特定の言語の基質にもとづいて言葉話すことを学び、さまざまな変形を作り出すことが出来るのはただ、この特定の言語体系の内部においてのみであって、さもなければそれは理解されないであろう。

主人公は己の自由を、あらかじめ与えられた形式 (例えばある特定の言語) の限界の内部で実現するのである。

第四の存在が、ある予め与えられたシステム——形式の基質なしに、遂行される発達である。たとえば、ある完全には合理化されるあるいは伝統化されていない社会において、人格の意志的感情的

な基盤は、そのいくつかの重要な面と部分とが発達する。環境の刺激に対して強く撰、択的に立向い、世界のさまざまな可能性を個人化して、“私の”断面に加工するのは、まさにこの第四の形式なのである。主人公はこの場合、その自由に関して、最も危険な恣意に至るまでの自由をすら与えられている。

この四つの発達概念にともなう、四つのちがった種類の自由が成立することは明らかである。これだけからしてもすでに一つの発達概念から、それとは全く調和し得ない自由の概念に対する結論を引き出すことは許されることが分るのである。

モンテッソーリの説においては、しばしば詳細に、発達に相應しい教育との関連で、生物学的な発達概念がこの見解の代表的な中心概念として挙げられている。それはそれでよい！考慮しなければならぬのはしかし、このような発達概念にマッチする主人公というものは、完全に受動的だ、ということである。一つのことのような発達が彼の身に起るのである。このような場合に“自由”という言葉を使うのは、首尾一貫しない幸せな場合について首尾一貫しない幸せな頭で語る人だけである。

このような世界の中のモノは、動物が己のさまざまな本能に所属する環境において出会うモノのように、すべて固定した意味を担うものである。この場合モノはすべて、背景にあるどうでもい

いもの——その動物に具わった本能の装備に対して何らの意味も持たないから——かあるいは——ある特定の本能——意味を持っているかどちらかである。

ところが人間の魂の発達が指し示すところはこの四つの発達水準のすべてであり、それにもなう四つの自由の程度のすべてなのである。どの段階においても、そのたびにまたそれに相應する対象の現象学を發展させることが出来る。われわれはここでは、ただいくつかの示唆を与えることが出来るに過ぎない。

一、生物学的発達概念の段階では——すでに見たように、——モノはただ本能に関連してのみそこに存在する。その場合客体(OBJECT)としてはおよそ全く存在しない。モノは生活のとるに足らぬ風景の一場面をなし、そこに本能に内在するモノが行動の契機として姿を現わすか、あるいは餌として、影を作る敵として、洞窟として等々。

二、活動発生的発達においては、対象は“一方通行路”としてのみ存在する。それは、ひとがその使い方を学ぶ、というただ一つの機能を有するのみである。このようにして子どもはハサミの扱い方を学ぶ。道具としての対象は、まだはつきりと、それを

利用する者が非常に限られた自由しか持つていないことを示している、たとえば、ハサミを持つには孔に手を入れて握らなければならない、とか、ハサミはかくかくの仕方で動かさなければならぬとか、その他の制限が沢山ある。ひとはハサミに関しては、一つの側面を学ぶことしか出来ない。モンテッソーリの対象概念は、主としてこの段階から理解すべきものである。かの女のいう対象とは教育の手段であつて、それは「学習するために」存在しているのである。それら対象は、ただこの一つの機能しか持たない。それらはわざとそういう制限をつけられている。それらは発達の道すじを強調するために奉仕させられているのである。

それに応じて、この教育観による「自由」とは、純粹に教育家的なものであつて、子どもは「厳密に環境によって固定された世界を診断する (Exposition) 自由を持つていただけである。

その上かの女のいう直観的—対象概念というものにしても、やはり、子どもの発達をも含めて世界全体の根底には、一つの特定且厳密に確定された基体 (Grundform) が横たわっている、という前提、すなわち純粹に物理的な世界秩序という基体が根底にある、という前提によって規定されているのである。このようにして、彼女の教育的—功利的体系の中には、それ以外の全く異なつた対象観の契機が入り込んで来ているのであるが、これを今度わ

れわれは、第三の発達概念との関連の中で初めて知るのである。

三、ある象徴的形式体系 (Formsystem) の基質の上で遂行される発達においては、象徴の機能というものが、——また対象の機能も——可能性として発見されていなければならない。根底にあるシステムのいかんによつて、対象の有する意味は多かれ少なかれ明瞭であつたり不明瞭であつたりする。根底にあるシステムが数列や化学の元素のようなタイプの排列的システム (Ordnungssystem) である場合には、このシステムが現代語かあるいは神話的世界像である場合とは全く違つたものになってしまうのである。

この後の場合には、さまざまの対象 (Objekte) は抽象的—範疇的 (abstrakt-kategorial) に整理されていて、中には途方もない内在的生産力を持ったシステムも存在する。これは例えば言語のシステムの場合がそうであり、この場合には絶えず新しい、それまでと言われたことのなかつたものを、すでに存在している言語系列の中へはめ込むことが許されるばかりか、新しい言語の手段を創り出すことさえも許されるのである。モノはこの段階では、人間の肉体との有機的な結びつきから切り離され、本能的な宿命からも解放されて、自由な観察の空間に置かれて、ほしいままに背景から取り出されて衆人環視の舞台に立つかと思つとまたもや

背景にひき戻されてしまったりする。

四、このようなシステムティックな基体すらも欠けている場合には、人間は感情的—力動的 (affektiv-dynamisch) な、世界に対する関連の網 (Beziehungnetz) を自ら創造する。かれは、生物学的な、有機的に拘束された対象を、活動発生的且つ体系的に、対象の特定の発達形式とともに己自身の中へとり入れ、それを解釈し直し、システム—対象によって同時に自身が解釈し直され、整理され、抑制される。かれは、自ら進んでではないが、それにも拘らず独自の、感動に満ちて己を忘れた創造性の中で、一つの世界像、すなわち一つの個人的な形姿を己自身のために撰ぶのである。

モノは、ここではその完全な意味の豊かさの中で己をあらわにし、解釈し意味を与えるという課題が、まさにこの場合ほど美しい仕事となることはない。ここでは小さな羽根が巨大な贈り物となり、最も高価な花びんが、愛情の欠如をかくす巨怪な仮面となるのである。ここでは、夜中にゆっくりと開くドアは、さし迫る危険かあるいは愛情に満ちて心を配る母親が今にも部屋へ入って来るといふ合図の印、開かれたドアは、外へ出るといふ誘惑の印か、あるいは満たされない欲求を抱いて無力感に陥った子どもの心を意味する。

これらすべての対象性 (Gegenständlichkeit) の段階を、子どもはほんのしばらくの間に知るのであるが、憧憬と思考のペースベクトイブ、善と悪との深淵が開かれる度合に従って、つねに新たな地平が姿を現わす。われわれの世界のモノは、ただ世界そのもの (Weltansch) へ還元されてしまわない、...というだけでなく、その反対に完全にわれわれの魂に所属するのだ、ということが明らかとなる。それどころか、——このようないささかどぎつい比喩を使わせてもらえば——モノが事実上われわれの心を住み処として繁殖するのである。モノはあくまでわれわれの意味を与える仕事の産物であると同時に、また明らかに無意味な世界の進んでいった住民なのである。この無意味性というものに、われわれの意味を与える生産力がとまり、われわれが正気を失った状態になるやいなや、たちまちモノは陥ってしまうのである。モノはわれわれ人間を、比較的遠く離れた人々のところへと導いて行くが、こうしてモノは、われわれとわれわれの子どもたちにとって全く必然的で近しいものとなり、完全に実現であり完全に課題であるような、そういう存在となるのである<sup>1)</sup>。

1) この章は、わずかな言葉使いの修正をしただけで、『教育学雑誌』(Zeitschrift für Pädagogik)一九五五年第二分冊(ハルツ社刊)に掲載されたものである。(完)

## 「幼児の教育」復刻によせて



本田 和子

「婦人と子ども(現『幼児の教育』)」が創刊された明治三十四年に、一つの雑誌が終刊を迎えた。明治十八年以降、知的女性を対象として、その啓蒙と開化に力をつくしてきた「女学雑誌」がそれである。「女学雑誌」は、明治女学校の教頭

であった巖本善治が、「女学の興隆」を目的として刊行したもので、プロテスタントイズムを基盤とし、思想・政治・文芸などのあらゆる分野にわたる総合雑誌であった。

「女学雑誌」の終焉と「婦人と子ども」の誕生が同じ年であったとは、私には、単なる偶然を越えて極めて興味深いことに思われる。もちろん、両誌の間には格

別の関連もなく、恐らくただの一度の接触もなかったに相違ない。ライバル誌として競合したわけでもないから、一方が幕を下ろし、他方が七十余年の隆盛を誇ろうとも、そこに何の因果関係もないのは当然であろう。

にもかかわらず、この両者を、婦人のための教養誌という同じ文脈の中に置いてみるなら、意味深く、女性文化のある断面を切り裂いてみせてくれるのではないか。「女学雑誌」がその生涯を終え、丁度その代りのように「婦人と子ども」が発足したというこの現象をコードとして、若干の解説を試みるのも、面白い仕事であるように思う。

「女学雑誌」は、女性の地位の向上と知的啓蒙を目指して、毎号が格調の高い論説で彩られていた。私たちの視野を、身辺の雑事から解き放して、広く社会・文化に向けさせようというねらいである。但し、幾分高踏的で難解なそれらの論説が、どのていどに読者の関心を引きつけ得たかは疑問である。今日、「女学雑誌」の名は、名翻訳家として命名を駆せした若松賤子(「小公子」の初代訳者)との関連で云々されることのみ多いのに気付くとき、そのあたりのことも、幾分の推測が許されそうに思える。



ともあれ、この雑誌の中で、人気の高かった記事の一つが、「小説欄」に掲載されたそれらであったことに疑問はない。「小公子」もまた、「新訳小説」として、第二二七号の「小説欄」に登場したのが最初であった。後に、掲載の場所が「小供のはなし」欄に移され、さらに、読者・批評子の好評に答えて単行本化されたのは周知のとおりである。

「女学雑誌」もまた、女性の営みの主要なものとして、家政や育児、とりわけ後者にかかなりの比重をかけていたことは事実である。医学博士何某の育児記事がしばしば誌上を賑わし、新生児の頭髪を剃ることや、虫下しを飲ませて胎便を排泄させるなどの、当時の産育の習俗に対して、新医学の立場からの警告がくり返されている。さらに、その具体化として誌面に登場したのが、「小供のはなし」欄であった。第九五号では、「孩提の翁」という署名入りの一文が、次のように斯欄開設の主旨をアピールしている。すなわち、わが国には、猿かに合戦などのよ

うな楽しい昔話があるが、その数が少なく、さらにそれらには幼児に不適当な要素も含まれている。一方、欧米には、児童文学の専門誌もあると言うことで、わが国の立ちおくれは、甚だ残念である。せめてものことに、この小さな欄を開設することにした、というのである。

この欄の起案者、そして、この文の筆者は、編集主幹であった巖本善治であろうと思われるが、彼の意識としては、附録のつもりであった「小供のはなし」欄が、最も熱心な読者を得たとは、皮肉とも言える出来事であった。そして、「女学雑誌」は、一般には、「小公子」の初出の場所として、今日までその名をとどめることになった。

「婦人と子ども」は、言うまでもなく、一般的な教養誌とはその性質を異にし、明らかに幼児教育専門誌であるから、「女学雑誌」と同列に論じられるべきではない。然し、創刊当時は、その題名が示すように、読者対象をプロの保育者に

限定せず、子どもにかかわりのある女性一般が射程内に置かれていたものようである。女性の教養も、或いはその向上も、子どもとのかかわりを抜きにして考えられない、という発想であろう。「婦人」と「子ども」を不可分の関係でとらえ、女性の教養は、子どもとの接点を通過するとき、真に生命的に開花する、と言うのである。

このことの可否は、改めて論じられてよい。然し、本誌が、後に「幼児の教育」と改名して、さらに専門性を明確にしたがら、今日まで健在を誇っていることを考えるなら、そこには、見逃し得ない幾つかの真理が、含まれていると言えよう。「子育て」に焦点を当てたこの雑誌は、「女学雑誌」に比して、明らかに「実用の書」であった。「女学雑誌」上で「小供のはなし」がよく読まれたのは、一つは、それが「役立つ」からであらう。その意味で、「婦人と子ども」は、全篇が「役立つ」或いは「役立つこと」に「関係のある」記事で埋められている。も

もちろん、その実用性は、今日のこの種の諸雑誌に見られるように、通俗的・即効的なものではなく、明らかに、高度であり、学問的でもあるが、「子育て」という現実の営みを中心に置くという点で、それは、飽くまでも「実用の書」であった。

ところで、この「実用の書」が、ある時期から、意図的に、しかもかなり大がかりに、非実用的な側面をかかえこみ始めた。文芸記事・絵画論などに代表される芸術性の投入がそれである。新しく編集責任者となった倉橋惣三が、その推進者であったことは言うまでもない。「婦人と子ども」に連載された文芸記事の数々、それらは、マーク・トウェイン、オルコット、ポーターなどの作品紹介であったり、或いはそれらを手がかりにした人間像・子ども像の探究であったりするが、今日、盛んに行なわれているこの種の作品研究の先駆として、注目されてしるべきであろう。さらに、倉橋惣三の

ユニークな絵画論は、改めて云々するまでもなく、新鮮な魅力に満ちている。

彼は、幼児教育の科学的研究に期待しつつ、同時に、いま一つの側面、すなわち、幼児に対する芸術的接近を強調した。「子育て」とは、真理の探究であると共に、美の追求でなければならぬのだ。

「女学雑誌」という高踏的な教養誌の中で、いつか読者の関心が文芸欄に集中し、「婦人と子ども」という高度な実用書の中で、いつか大幅な重みが文芸欄にかけられる。前者の場合は、その実用性のゆえに、そして、後者は、その非実用性のゆえに。ここに、文学や芸術の両義性が顔をのぞかせている。と同時に、女性文化の一つのありようをも、うかがい知ることが出来る。すなわち、それは、抽象的な思想性から遠く、常に実用を志向しつつも、美との関連を不可欠とする姿なのである。

## 幼児の教育 第七十八巻第二号

二月号 © 定価二五〇円

昭和五十四年 一月二十五日 印刷  
昭和五十四年 二月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

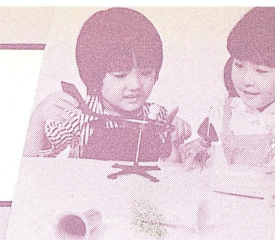
101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

# 54 キンダー 年度 科学教材シリーズ



●年間を通じて、カリキュラムに組み入れられる教材を選んであります。

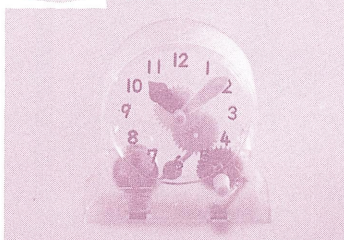
○4月以降、隔月にお届け致します。○キンダーブックと合わせて効果的にご使用下さい。

★Aセット 年間6セット 1,500円/1セット 250円

4月 さいばいセット

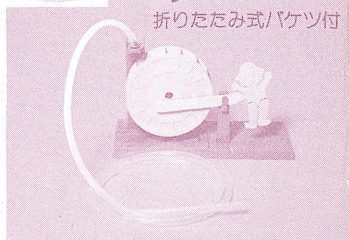


6月 とけい(はぐるま)

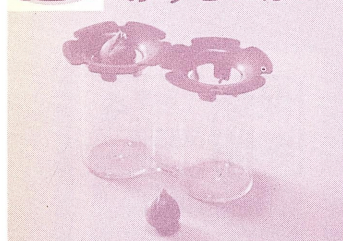


8月 すいしゃ

折りたたみ式パケツ付



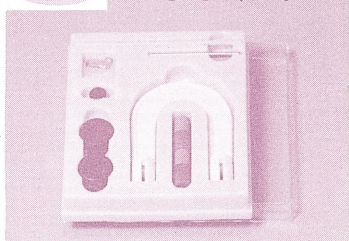
10月 みずさいばい



12月 かがみ  
(ミラーボックス)



2月 じしゃく



★Bセット 年間6セット 1,500円/1セット 250円

4月 かざみ(ひこうき型)



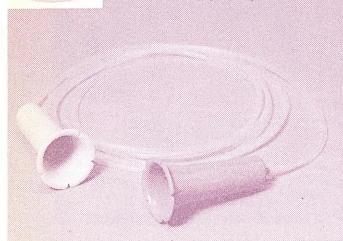
6月 かんさつケース  
(むしかご兼用)



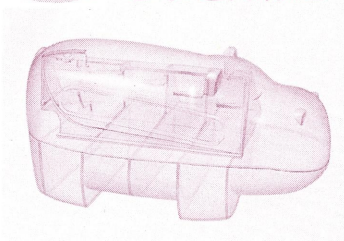
8月 ふいね(すいりく両用)



10月 でんわ



12月 ちよきんばこ



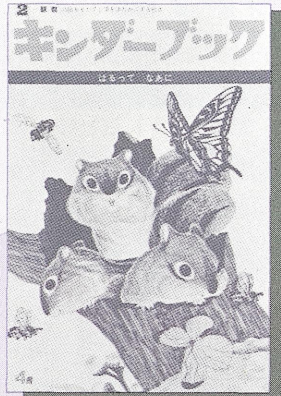
2月 はかり



"大きく、のびのびと、ゆたかな子どもに育てほしい"  
 52年の歴史をもつキンダーブックは、今年も、より充実した内容でお応えします。



情操をゆたかにし創造力をのびます  
**キンダーブック①-情操**  
 4月号『みんな あつまれ』  
 ●付録・こいのぼりの工作  
 団体購読価 月 200円



観察の眼をそだて心情をゆたかにする  
**キンダーブック②-観察**  
 4月号『はるって なあに』  
 ●付録・こいのぼりの工作  
 団体購読価 月 200円



科学する心を育て自然に親しませる  
**しぜん-キンダーブック③**  
 4月号『もんしろちょう』  
 ●付録・こいのぼりの工作  
 団体購読価 月 200円

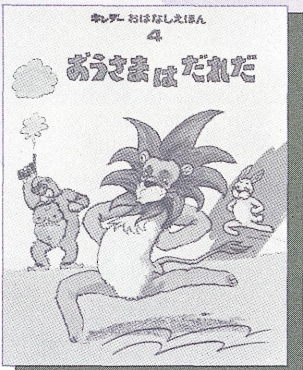


フレーベル館の  
**月刊7誌**

幼児らしい夢をそだてる  
**キンダーメルヘン**  
 4月号『おめでとう ぞうさん』  
 ●付録・こいのぼりの工作  
 団体購読価 月 200円



**保育専科** 1979 4  
 今月のウレキユラム  
 自らの眼で導いて  
 子どもの自主性をのびる保育を  
 ●● 自発性と自主性の保育 〇 5歳4月の指導計画と家庭所  
 望をわけて ●●●●●『在園指導計画』



保育をゆたかにする  
 実践的保育専門誌 **保育専科**  
 4月号〇自発性と自主性をたかめる保育  
 特集〇新入・進級児指導のポイント  
 定価 330円

幼児の美しい心を育てる  
**キンダーおはなしえほん**  
 4月号『おうさまは だれだ』  
 ●付録・こいのぼりの工作  
 団体購読価 月 200円



園児をもつ母親のための専門誌  
**ホームキンダー**  
 4月号 特別企画  
 しつけのことわざに誤りはないのかな？  
 ☆ことわざ風しつけ勉強法☆大場牧夫  
 団体購読価 月 250円

くわしくは、フレーベル館代理店・支社・支店・営業所・または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

**フレーベル館**